

作道遺跡発掘調査報告

市道松木作道線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

2006年3月

富山県射水市教育委員会



調査対象地遠景



作道遺跡出土遺物（土器）



作道遺跡出土遺物（石製品）

作道遺跡発掘調査報告

市道松木作道線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

2006年3月

富山県射水市教育委員会

序

富山県射水市は、平成17年11月1日に新湊市、射水郡小杉町、大門町、大島町、下村の1市3町1村が合併して誕生しました。

射水市は、北は富山湾に面し、南に射水丘陵、中央部には肥沃な射水平野が広がっています。当市は、古くから日本海交易や放生津潟に流れ込む河川を利用した水運の交通網が発達し、旧石器時代以来の遺跡が密集する射水丘陵、万葉集にも詠まれた三島野や奈呉の浦、古代の神事を今に伝える下村の加茂神社、中世期に越中の政治・経済・文化の中心地として栄えた放生津など、市内各所に先人たちの足跡が残されています。

先人が残した歴史・文化は、現代に生きる私たちが未来へ引き継ぐべき貴重な財産であります。市内に残る数々の遺跡も、地域に根ざした歴史を語り継いでくれる重要な郷土資料と言えるでしょう。

本報告書は、射水市（旧新湊）作道地区で計画されている市道改良工事に先立ち実施した、作道遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。

調査では、弥生時代中期を中心とする多くの遺構や、土器・石器等が見つかりました。また、遠く信州から運ばれてきたと考えられる遺物も見つかっており、当時の活発な交流活動を窺い知ることができます。

今後これらの遺跡を保護し、また地域の歴史を広く一般に紹介することに本報告書が多少なりとも役立つことができれば幸いと存じます。

最後に現地調査から報告書作成まで多大なご協力・ご助言を賜った関係諸氏に感謝申し上げますとともに、今後とも文化財の保護に変わらぬご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年3月

射水市教育委員会

教育長 竹内 伸 一

例言

1. 本書は、平成16・17年度に実施した富山県射水市(旧新湊市)作道地内に所在する、作道遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、射水市作道地区で計画された市道松木作道線(旧幹1-16号線)道路改良事業に先立ち、新湊市産業建設部建設課の委託を受け、新湊市教育委員会が主体となり実施した。
3. 調査事務局は平成17年10月31日までは新湊市教育委員会生涯学習課に置き、生涯学習課長 川口泰子が調査事務を総括した。同年11月1日以降は、調査事務を射水市教育委員会文化課が引き継ぎ、文化課長 川口武治が調査事務を総括した。
4. 調査期間、面積及び調査担当者は以下のとおりである。

【現地発掘調査】

試掘調査	平成16年3月1日～3月4日、平成16年11月17日	
	調査担当者	新湊市教育委員会生涯学習課 文化財保護主事 金三津英則
本発掘調査	平成16年度	A・B・C・D地区(平成16年7月1日～12月17日) 939㎡
	調査担当者	新湊市教育委員会生涯学習課 文化財保護主事 金三津英則
	平成17年度	E・F地区(平成17年10月6日～10月31日) 512㎡
	調査担当者	新湊市教育委員会生涯学習課 文化財保護主事 金三津英則 榊中部日本鉱業研究所 新宅輝久 松尾洋次郎

【整理・報告書作成】

新湊市教育委員会 文化財保護主事 金三津英則(平成17年11月1日より射水市教育委員会文化課 学芸員)

5. 本書の執筆・編集は、第4章をパリオ・サーヴェイ株式会社、榊中部日本鉱業研究所 松尾洋次郎が行い、それ以外は金三津が担当した。
6. 調査の実施から本書の作成にあたっては、下記の方々から貴重なご教示・ご指導をいただいた。記して謝意を表したい。(敬称略 五十音順)

上野 章 岡本淳一郎 岡田一広 久々忠義 中西 聡 林 大智 馬場伸一郎 久田正弘 藤田慎一

7. 木製品を除く遺物図版の掲載写真は、西大寺フォト(杉本和樹氏)に撮影を委託し、その成果品を使用した。
8. 現地発掘調査及び整理作業参加者は、下記のとおりである。(敬称略 五十音順)

【現地発掘調査】秋山和雄 網谷龍二 荒谷喜和 伊藤信敬 井波健紀 今村正記 海老伸悦 萩野道子 加藤 壺
甲 輝夫 久郷平行 佐伯 登 島倉智子 善光久幸 高山真弓 武脇昭子 谷口桂二 永田 修
中村 弘 永森道子 西野 彰 橋 光男 八田 弘 藤本百合子 朴木忠行 堀 よし子
前川愛子 松井コウ 見津定雄 湊 敬之 南 弘喜 宮口美香 村瀬剛雄 山田次男 山谷貞夫
吉久 実

【整理作業】川口和美 楠井悦子 田中久美子 矢野由紀恵

9. 出土遺物、記録図面等は射水市教育委員会が一括して保存・公開している。

凡 例

1. 本書の挿図に用いた方位は真北、水平基準は海拔高である。なお、遺構の標記にあたっては下記の略号を使用した。
SK：土坑 SP：柱穴・小穴 SD：溝 SE：井戸 SR：自然流路 SX：不明遺構
2. 本書の土層及び出土遺物の色調は、小山忠正、竹原秀雄編著『新版標準土色鑑』(1996年版)に準拠している。
3. 遺物実測図中の土器などの表現は次のとおりとした。
■：珠洲焼の断面 □：赤彩
4. 出土遺物の番号は、実測図・観察表・写真図版の遺物番号にそれぞれ対応している。

目次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	3
2 現地発掘調査及び整理作業の経過	3
第3章 調査の方法と成果	
1 調査の方法	4
2 基本層序	5
3 遺構および出土遺物	5
第4章 作道遺跡出土遺物の年代測定	
1 はじめに	31
2 試料および分析	31
3 分析結果	31
第5章 総括	
1 弥生時代中期の土器について	33
2 調査のまとめ	34

挿図目次

第1図 射水市位置図	1
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第3図 調査区及びグリッド配置図	4
第4図 基本層序模式図	5
第5図 A地区・B地区遺構配置図	7
第6図 A地区遺構実測図 (SX03,SD04,SD09,SD10,SD11,SK12)	9
第7図 B地区遺構実測図 (SD14,SK15,SK16)	10
第8図 C地区・D地区遺構配置図	11
第9図 C地区遺構実測図1 (SK01,SK09,SD12,SK13,SD17)	14
第10図 C地区遺構実測図2 (SX05,SD06,SD07)	15
第11図 C地区遺構実測図3 (SD22,SD23,SK24,SK25)	17
第12図 C地区遺構実測図4 (SD22,SD26,SD27,SD28)	19
第13図 D地区遺構実測図1 (SK01,SK02,SK03,SK09,SK14,SK16)	21
第14図 D地区遺構実測図2 (SD19,SK24,SD25,SD27,SD28,SK29)	22

第15图	E地区·F地区遺構配置图	23
第16图	E地区遺構実測图1 (SK01,SK02, SX03,SK04,SK11,SK12,SK32,SP33,SK34,SK43,SK44)	26
第17图	E地区遺構実測图2 (SP20,SP21,SP22,SP23,SE24,SD28,SE39)	27
第18图	F地区遺構実測图 (SK03,SK04)	28
第19图	A地区·C地区·D地区自然流路断面图 (A地区SR14 C地区SR21,SR29 D地区SR23)	29
第20图	E地区·F地区自然流路断面图 (E地区SR14 F地区SR08)	30
第21图	作道遺跡坐落構成推定图	34
第22图	出土遺物実測图1 (土器1~8:A地区SX03,SD04,SD10,SK12)	36
第23图	出土遺物実測图2 (土器9~26:A地区SR14)	37
第24图	出土遺物実測图3 (土器27~52:A地区SR14 B地区SD14,SK15,SK16)	38
第25图	出土遺物実測图4 (土器53~70:C地区SK01,SD06)	39
第26图	出土遺物実測图5 (土器71~84:C地区SD06,SD07)	40
第27图	出土遺物実測图6 (土器85~107:C地区SD07)	41
第28图	出土遺物実測图7 (土器108~127:C地区SD07)	42
第29图	出土遺物実測图8 (土器128~141:C地区SD07,SK09,SK11)	43
第30图	出土遺物実測图9 (土器142~164:C地区SK11,SD12,SK13,SD17)	44
第31图	出土遺物実測图10 (土器165~186:C地区SD17,SR21)	45
第32图	出土遺物実測图11 (土器187~202:C地区SR21,SD23)	46
第33图	出土遺物実測图12 (土器203~218:C地区SK24,SK25,SD27)	47
第34图	出土遺物実測图13 (土器219~234:C地区SD27)	48
第35图	出土遺物実測图14 (土器235~250:C地区SD28,SR29)	49
第36图	出土遺物実測图15 (土器251~277:D地区SK01,SK02,SK03,SK09,SD13,SK14)	50
第37图	出土遺物実測图16 (土器278~297:D地区SK16,SK18,SD19, SX26,SD27,SD28)	51
第38图	出土遺物実測图17 (土器298~314:D地区SR23,SK24,SD25,SK29)	52
第39图	出土遺物実測图18 (土器315~333:E地区SK01,SK02,SK04,SK10,SK11,SK12,SK34)	53
第40图	出土遺物実測图19 (土器334~350:E地区SP15,SP23,SP30,SK32,SE39,SK42,SK43,SK44)	54
第41图	出土遺物実測图20 (土器351~363:E地区SX03,SR14, SX38 F地区SR08,包含層)	55
第42图	出土遺物実測图21 (土器364~375:E地区SD28)	56
第43图	出土遺物実測图22 (土器376~386:F地区SK03,SK04,SK05,SK07)	57
第44图	出土遺物実測图23 (石製品)	58
第45图	出土遺物実測图24 (木製品)	59

第1章 遺跡の位置と環境

射水市は、富山県のほぼ中央に位置し、市域は東西約11km、南北約15kmで総面積109.18km²である。東西を県下の二大都市である富山市、高岡市に隣接し、交通の便にも恵まれていることから、高度経済成長期以降住宅団地の造成が頻繁に行われ、ベッドタウン化が進んでいる。現在の人口は約95,000人余りである。市域内には、日本海側最大級の特定重要港湾である伏木富山港（新湊地区）や北陸自動車道小杉インターチェンジがあり、両者を南北に結ぶ国道472号と東西を走る国道8号が交差している。

地勢は、北は富山湾に面し、射水丘陵を背後に射水平野が広がる穏やかな地形となっており、庄川・下条川などの河川が日本海へと流れている。気候は夏季には高温多湿、冬季には降雪量の多い日本海型気候であり、年間を通じて豊富な水資源に恵まれている。

射水平野は、東の神通川と西の庄川に挟まれた東西約11km、南北約7kmの三角形沖積平野で、丘陵部から流れる河川によって運ばれた土砂や粘土・礫が堆積している。およそ6,000年前のいわゆる縄文海進の時代には、温暖化による海水面上昇が生じ、標高約5m以下は海面下に没していたと考えられている。縄文時代中期以降、気候の寒冷化による海水面の低下や、丘陵部からの土砂の堆積が進捗することで、海岸近くの放生津潟（現富山新港）を残し周辺に広大な低湿地を形成した。標高差を殆ど持たない放生津潟周辺では河川の流が滞留し沼沢地を形成、湿原の植物が枯れて泥炭が堆積し、平野部が開けていくことになる。乾田化の進んだ現在ではかつての面影を留めていないが、数十年前までは縦横に水路が走る水郷地帯として知られていた。

射水丘陵は新生代第三紀の青井谷泥岩層が基盤となり、上層には礫と砂記からなる日ノ宮五層と太閤山火砕岩層が堆積し、銀治川・下条川・和田川やその支流によって河岸段丘や樹枝状の谷間が形成されている。

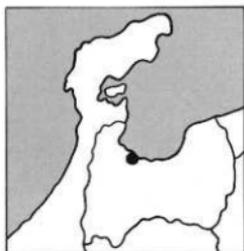
このような自然環境のなかで、先人達は生活の場を求めながら集落を形成していった。現在市内には459箇所の遺跡が密集しており、平野部に集落遺跡、丘陵部に古墳や生産遺跡の立地が多く確認されている。

丘陵部には後期旧石器時代以来の先人達の足跡が残されている。縄文時代には生活の場として、弥生～古墳時代にかけては墓域としても利用され、多数の方形周溝墓や古墳が確認されている。古代には高岡市伏木に国府が設置され、射水丘陵は国指定史跡の小杉丸山遺跡をはじめ、小杉流通業務団地内遺跡・上野南遺跡など須恵器窯跡39遺跡、製鉄遺跡147遺跡を数える県内最大規模の生産遺跡集中地帯となった。窯や炉を築くのに適した地形、粘土・薪・水等の原料供給源の豊富に加え、生産地と消費地が河川を通じて直結するなど、数々の条件に恵まれていたための立地と考えられている。

平野部では縄文時代中期以降、沖積平野の形成に伴い人々が生活圏を広げていった。水稲耕作が本格化した弥生時代以降には遺跡数が飛躍的に増加し、高島A遺跡・北高木遺跡・二口油免遺跡・小杉伊勢領遺跡などの集落遺跡が、河川に近しい自然堤防や微高地に分布する。古代以降には、丘陵部と平野部及び日本海とを河川が結び、交通・輸送の要衝として多くの集落が営まれていたと考えられており、中世には新湊市街地にあたる放生津が発展し、守護所が設置されるなど、越中の政治・経済・文化の中心地として栄えた。

作道遺跡は、射水市北部の国道8号北側に所在する弥生時代を中心とする遺跡であり、南北約960m、東西約600mの範囲に広がっている。一帯の標高は約0.4～0.8mである。作道遺跡の周辺部には高島A遺跡・朴木A遺跡・朴木C遺跡・松木中鹿遺跡・松木遺跡・中曾根遺跡・中曾根西遺跡・津幡江遺跡など弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺跡が密集している。

特に、今回の調査区から国道472号を挟んだ西側に隣接する高島A遺跡では、平成9年度の調査で弥生時代中期後半の方形周溝墓や円形の周溝状遺構が確認されており、作道遺跡との関連性が伺える。同様に、周辺部の弥生時代遺跡も存続時期が重複するものが多く、今後調査の進展が待たれるところである。



第1図 射水市位置図



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/50,000)

番号	名称	時代・種別	備考
1	作道遺跡	弥生(中)集落、古代・中世散布地	弥生中期中心、栗林系土器
2	高島A遺跡	弥生(中)~古墳(中)集落、中世散布地	弥生中期方形周溝墓、弥生後期中心
3	朴木A遺跡	弥生・古代・中世散布地	櫛形土器の出土記録有
4	朴木C遺跡	弥生~中世散布地	弥生中期土器出土、弥生後期中心?
5	中曾根遺跡	弥生集落、古墳~中世散布地	弥生後期中心
6	中曾根西遺跡	弥生集落、古代・中世散布地	弥生後期住居址、方形周溝墓、栗林系土器
7	松木遺跡	弥生(中・後)集落	弥生後期中心
8	松木七口遺跡	弥生・古代・中世散布地	弥生後期中心
9	松木中鹿遺跡	弥生~古墳集落、中世散布地	弥生終末~古墳前期中心
10	高木・荒畑遺跡	古代集落?、縄文(後)~弥生・中世散布地	古代中心
11	津幡江遺跡	弥生(中)集落、縄文・古墳散布地	栗林系土器
12	北高木遺跡	弥生・古代・中世集落、縄文散布地	古代人面墨書土器、木製祭祀具等多数
13	小林遺跡	弥生~中世集落	栗林系土器
14	下村加茂遺跡	弥生(前?)・中世集落	弥生前期?木製品貯蔵施設、中世厩館
15	HS-04遺跡	弥生・中世集落、縄文・古墳・古代散布地	弥生後期周溝、土器多数出土
16	愛宕遺跡	古代散布地	

第1表 遺跡概要

第2章 調査の経緯

1 調査に至る経緯

市道松木作道線（旧幹1-16号線）は、射水市松木～作道までの延長約2.4kmを結ぶ。近年、一般国道8号の迂回路として利用が増加してきたため、交通量の増加に伴う車線及び安全な歩道の確保が必要となり、幅員を拡幅する道路改良工事が平成11年以降継続的に実施されている。

平成15年11月、新浜市産業建設部建設課から同市道に係る国道472号以東の整備計画の照会が寄せられた。これを受けて市教育委員会は、路線区域が周知の埋蔵文化財である作道遺跡の範囲内であるため、文化財保護法第57条の3第1項の規定による埋蔵文化財発掘の通知及び埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査が必要である旨回答し、路線に係る用地取得の進捗に併せて、順次試掘調査を実施することとした。

試掘調査は、平成16年3月1日～4日、平成16年11月17日の2回に分け、新浜市教育委員会が主体となって実施した。調査対象範囲は路線計画区域全域の6,128㎡としたが、国道472号との交差点部分にあたる218㎡に関しては、平成9年度に実施した試掘調査で既に遺構・遺物の存在が確認されているため、これを除外した。試掘トレンチは、路線拡幅予定地に対して平行に21本を設定し、バックホウ及び人力によって地表下25～80cmまで掘り下げ、遺構の有無や深さ等を確認した。発掘面積は315㎡で、調査対象面積の約5.1%である。

試掘調査の結果、国道472号との交差点東側に位置する1,451㎡の範囲にかけて、弥生時代中期を中心とする遺構・遺物の存在が確認された。そのため、工事の施工に際してはその保護措置が必要となった。事業主体である新浜市建設課からは、既存の市道拡幅という事業の性格上、路線・工事計画の変更は不可能であるとの回答を受け、関係者間での協議の結果、工事施行に先立ち新浜市教育委員会が主体となって、記録保存を目的とする発掘調査を実施することで合意した。

2 現地発掘調査及び整理作業の経過（第3図参照）

現地における発掘調査は、調査区が市道及び農道によって分断されているため、調査区を西側からA（作道366-2）、B（作道365-2）、C（作道354-2）、D（作道315-2）、E（作道345-2）、F（作道316-2）の6地区に分け、工事計画及び調査体制を勘案して、平成16年度にA・B・C・D地区、平成17年度にE・F地区の2か年に渡って実施した。平成17年度は、7月1日にA地区の表土除去作業を開始、表土除去作業の完了後に基本測量を行い、7月6日より発掘作業員を投入し、7月23日に現地における発掘調査を完了した。B・C・D地区は耕作が行われていたため、収穫の完了を待って、10月12日にB地区の表土除去作業を開始、表土除去作業の完了後に基本測量を行い、10月18日より発掘作業員を投入した。10月21日には台風23号により現場プレハブ3棟が倒壊するなど被害を受けた。その後も天候不順が続き、激しい濁水と降雨により調査区が度々水没するなど排水作業に多くの時間を費やす結果となったが、12月9日にラジコンヘリコプターによる調査区全景写真撮影及び航空写真測量を行い、12月17日に現地調査を完了した。

平成17年度はE・F地区を調査対象とした。B・C・D地区と同様に両地区共に耕作が行われていたため、収穫の完了を待って調査を開始することとしたが、調査を予定していた10月は11月1日の市町村合併を目前に控えており、合併に伴う事務のため調査員の確保が困難となったため、E・F地区に関しては新浜市教育委員会の監理のもと、㈱中部日本鉱業研究所から調査員の派遣を受けて調査を実施することとなった。10月6日にE地区の表土除去作業を開始し、表土除去作業の完了後に基本測量を行った。10月26日にラジコンヘリコプターによる調査区全景写真撮影及び航空写真測量を行い、10月31日に現地調査を完了した。

A～D地区の整理作業は、現地調査完了後の平成17年1月から開始し、この内、B・C・D地区の出上品整理業務の一部（洗浄～注記）を㈱中部日本鉱業研究所に委託して実施した。E・F地区の出上品等整理業務は、現地調査に引き続き㈱中部日本鉱業研究所に委託して実施した。

発掘調査報告書の作成は、平成17年度に新浜市教育委員会（平成17年11月1日より射水市教育委員会）が実施した。

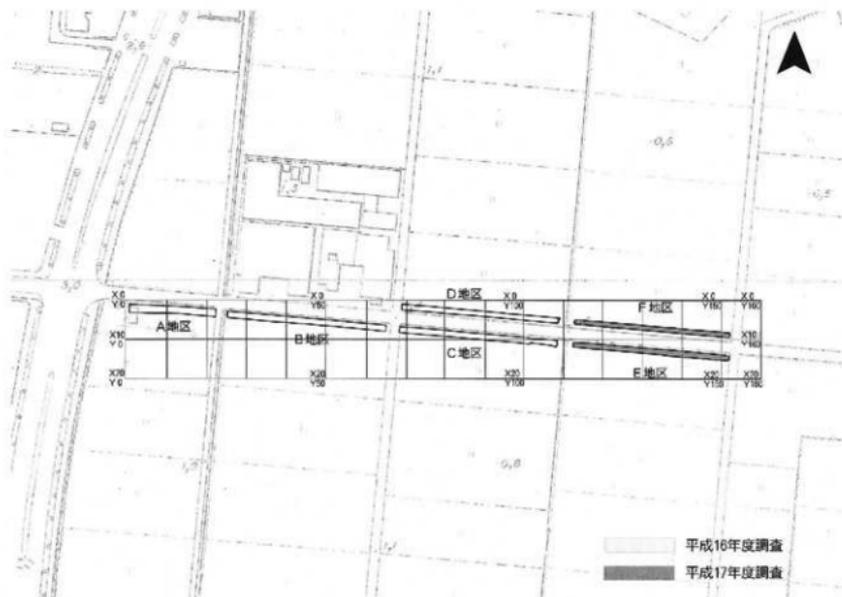
第3章 調査の方法と成果

1 調査の方法

現地発掘調査は、表土除去作業にバックホウを使用し、調査区床面及び壁面の精査・遺構検出・遺構発掘及び遺物の取り上げを人力で行った。確認した遺構は、遺構概略図(1/100)の作成後、土層観察用のベルト設定及び半截→土層断面図作成・写真撮影→遺構完測・遺物取り上げの順に作業を行い、これと平行して遺構平面図(1/20)を作成した。

各調査区においての調査方法は同一であるが、A地区以外の調査区では、遺構平面図の作成に航空写真測量を用いている。B・C・D地区では、測量業務一式と遺構平面図作成・航空写真撮影を㈱エイ・テックに委託し、E・F地区は新浜市教育委員会の監理のもと、㈱中部日本鉱業研究所から調査員の派遣を受けて、測量及び発掘調査を実施した。

調査に際しては、国土地理院設定第Ⅶ座標系公共座標のX=83.836、Y=7.136を原点とし、東西方向をY軸、南北方向をX軸とする公共座標に基づき2m×2mのグリッドと、調査区の形状に合わせた1m×1mの任意グリッドとを併設、現地調査の時点では任意グリッドを使用し、整理作業及び報告書作成の段階で公共座標への変換を行った。



第3図 調査区及びグリッド配置図(1/2,500)

2 基本層序

調査対象地の現況は標高約0.8mの水田であり、南西から北東に向けて徐々に標高が低くなる。調査区は東西に細長く延長およそ300mに達するが、比較的標高差の少ないフラットな地形であり、層序に関してはほぼ一定の堆積状況を示している。

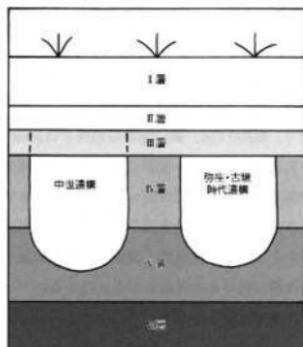
基本層序は上層から、I層：黒褐色粘質土・黄灰色粘土。II層：黄褐色粘土・暗灰黄色粘土、同色シルト。III層：黒色粘土・黒褐色粘土。IV層：黄灰色粘土・ふい黄色粘土、同色シルト・黄褐色シルト・灰色粘土。V層：緑灰色シルト。VI層：暗緑灰色粘土となる。

I・II層は水田耕作土である。現在資材置場として利用されているA地区では、上面に最大0.8mの造成盛土が堆積している。II層は水田床土としてI層と区別した。

III層は弥生時代の遺物包含層である。II～III層の層界は平坦で明確に区別されるが、これは昭和40年代初頭頃までに行われたは場整備に伴う田面高調整の影響によるものであり、II層以上はその後の堆積土と判断できる。III層の大部分は、このは場整備による削平の影響を受けており、特に標高の高い場所ではIII層が消滅し、IV層にまで影響が及んでいる。

IV層は弥生～中世の遺構検出面となる。土質・色調は場所によって様々であるが、これは現在の地下水位や地表からの深さ等による水分の差異によるもので、基本的には同質のものと考えられる。E地区では中世の遺構も同一面で検出しているが、本来はIII層より上位に中世期の遺構面が存在していたとみられる。

V層以下はD・E地区のみで確認している。IV層以下に遺物等の混入が認められないため、V・VI層の確認をもってIV層以下を地山と判断した。VI層以下に関しては、湧水が激しく、遺物の混入も認められないため確認を行っていない。



第4図 基本層序模式図

3 遺構および出土遺物

調査の結果、調査区のほぼ全域で弥生時代中期を中心とする遺構・遺物を確認した。今回の調査では、C・D地区で最も遺構・遺物の密度が高くなるが、遺構密度の低いB地区でも遺構面の標高が他の調査区に比して高かった分、削平により遺構・遺物が失われたものと考えられ、本来は調査区の南西部分を中心に遺構が分布していたものと考えられる。

また、幅3m弱の東西に細長い調査区であるため、全形が判明した遺構は少ない。そのため本報告では、ある程度の形状が把握できるもの、調査区をまたいで存在し、規模・形状が推定できる遺構以外は土坑として取り扱っている。

出土遺物には縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器、珠洲焼、中世土師器皿、青磁、白磁、越中瀬戸焼、近世以降の陶磁器、打製石斧、磨製石斧、石包丁、砥石、玉類の未製品、木製品、曲物、ヒスイ・緑色凝灰岩・鉄石英等の原石があり、60cm×40cm×15cmのコンテナ換算でおよそ90箱分が出土している。

出土遺物の大部分は弥生土器であり、そのうち9割以上が弥生時代中期の土器で占められている。削平の影響により遺物包含層の大部分が消滅しているため、必然的に削平を免れた遺構中～底部からの出土遺物が中心となっている。土坑・溝状遺構等から比較的多量に出土しているが、幅3m弱という調査区の制約上全体を完掘した遺構は少なく、遺物量に比して完形に復元できるものは少ない。図化・報告書掲載遺物の選定にあたっては、土器類は口縁部・比較的残りが良く遺構出土のもの・全体形状の判明するものを中心とし、木製品・石製品は完成品及び特徴的なものを抽出した。

【A地区】

SX03・SD04 (第6図)

SX03は、調査区西端部に位置する長辺約3.9m×短辺約1.8mの長方形の土坑である。検出面からの深さは5～28cmで上面がかなり削平を受けている。床面はほぼフラットであるが、南半部が一段深くなる。SD04は北東隅でSX03を切る溝で、幅約0.7m、検出面からの深さは20cmである。

SX03南半部の一段深く掘り込まれた部分とSD04とはほぼ直角に近接するため、両遺構の関連が伺えるが、断面観察ではSD04がSX03を切っている状況であり、かつSX03南半部は両遺構内で完結し、最終的にSX03と同時に埋まっている。またSX03南半部をSX03とは別の溝状遺構と見た場合でも、位置的にはSX04とT字に近接し、A地区西側に位置する平成9年度高島A遺跡調査区で確認された、四隅を切り残す方形周溝墓のようにコーナー部分を形成しないため、両遺構は別のものとみるべきと考える。

遺物は弥生土器(SX03:1～4、SD04:5)が出上している。1は球状の胴部中位に最大径をもつ壺で、外面は粗いハケ調整で仕上げ、直線文・線状文・斜行短線文・扇形文で加飾する。内面のハケメは丁寧にナデ消されている。頸部以下がほぼ完形であり、口縁部を意図的に打ち欠いたものと考えられる。2は口縁端部を櫛状具で刻み、口縁内面に斜行短線文を施す。胴部以下は無文となり、内外面を細かなハケ調整で仕上げるなど1と対照的である。1・2は、床面直上の①層で口縁部を向かい合わせにした状態で出土している。3・4は1・2と同じ①層からの出土である。

遺構形状や遺物出土状況に加え、弥生時代中期の方形周溝墓が確認された平成9年度調査区に近接することから、方形周溝墓の主体部や上杭墓等の埋葬施設としての性格が考えられる。

SD09 (第6図)

SD04の約1.3m東側に位置し、削平により調査区中央部で消滅している。図示していないが、弥生土器細片が出土している。

SD10 (第6図)

SD09東側に並行する溝。削平により調査区中央部で消滅しているが、本来はSD11と同一の遺構とみられる。弥生土器の壺(6)1個体がほぼ元位置を保った状態で出土しているが、磨耗・風化が激しく胴部以上を復元することはできなかった。

SD11 (第6図)

調査区南端部で確認した溝で、削平により調査区中央部で消滅しているが、本来はSD09と同一の遺構とみられる。図示していないが、弥生土器細片が出土している。

SK12 (第6図)

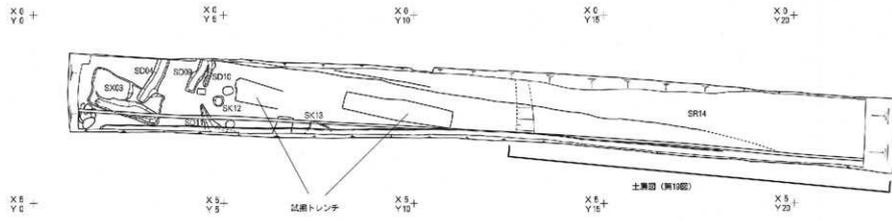
長径0.55m×短径0.5mのほぼ円形の平面プランを呈する土坑で、検出面からの深さは約20cmである。古墳時代前期頃のものと思われる壺(8)及びミニチュア土器(7)が出上している。8は外面に煤が厚く付着し、二次的な被熱のためか器面の剥落が目立つ。出土状況から、7が8の内部に納められた状態で埋納されたものとみられる。8の胴部中位以上が失われているため、遺構上部が削平により消滅していることが明らかである。

SR14 (第5・9図)

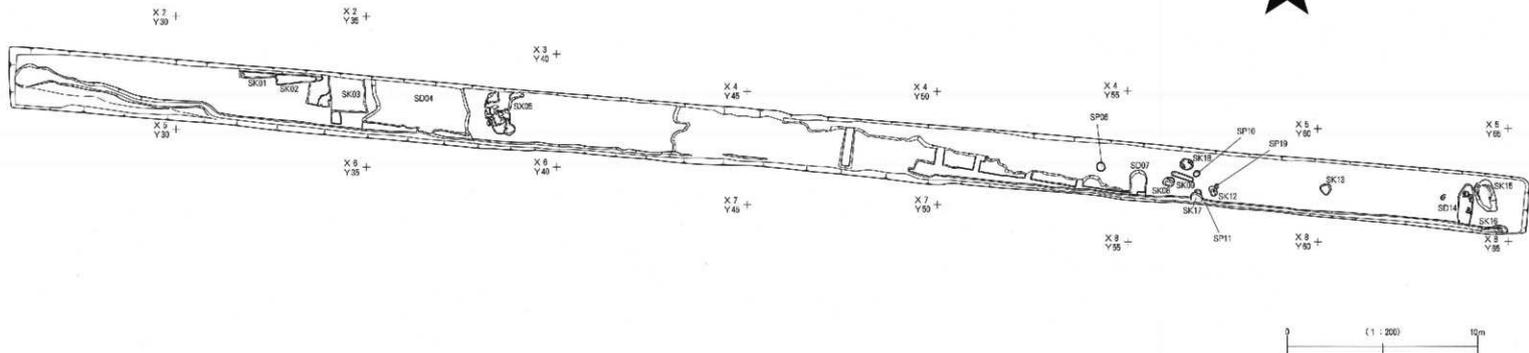
調査区中央部から東端部に位置する自然流路。B地区西端で西へ向けて徐々に標高が低くなって行くため、26m余りの流路幅を想定できる。埋土は植物遺体が多く含まれた黒色粘土が主体となり、流れの弱い河川であったと考えられる。

流路全域の底面附近から弥生土器(9～27・29～38)及び鑿等の柄とみられる木製品(第45図1)が出上している。特にY19～22にかけての③・⑦・⑩層では遺物の密度が高く、弥生時代中期を中心とする土器がまとまりをもって出土している。弥生土器には24・34等、在産のもの明らかに胎土・調整・施文方法が異なり、中部高地からの搬入品とみられる粟林式系統の土器も含まれる。また、口縁部に突起をもつ浮線文系統とみられる浅鉢(28)や、弥生時代後期に帰属するとみられる長頸壺(17)等も底面附近で出土するため、縄文時代晩期末～弥生時代後期にかけての比較的時期幅をもつ流路と考えられる。

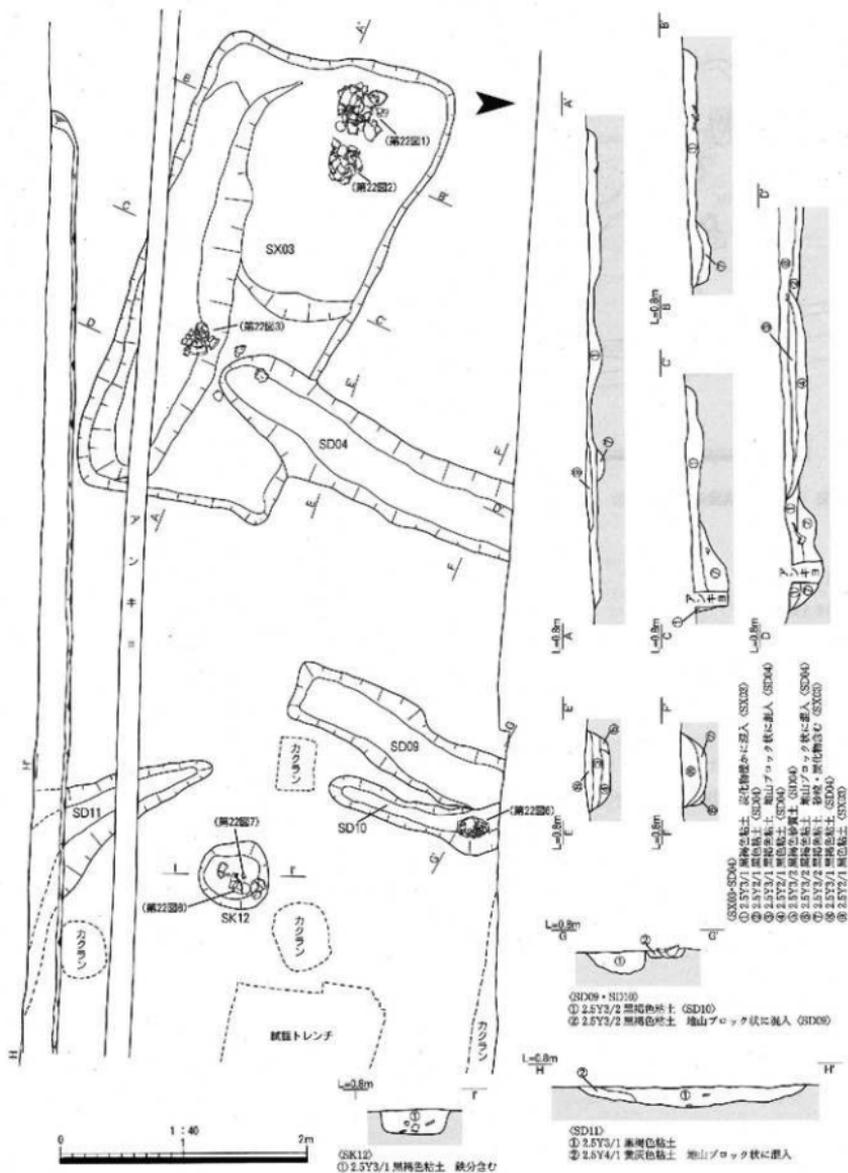
A地区



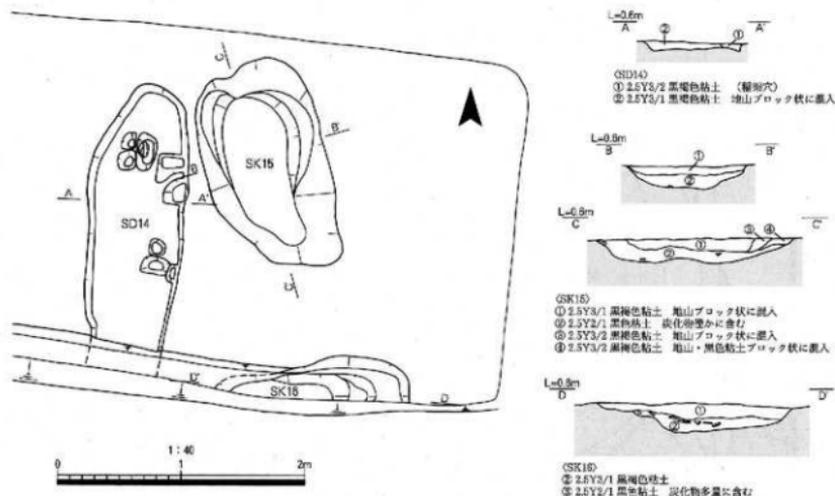
B地区



第6図 A地区・B地区遺構配置図 (1/200)



第6図 A地区遺構実測図 (1/40)



第7図 B地区遺構実測図 (1/40)

【B地区】

SD14 (第7図)

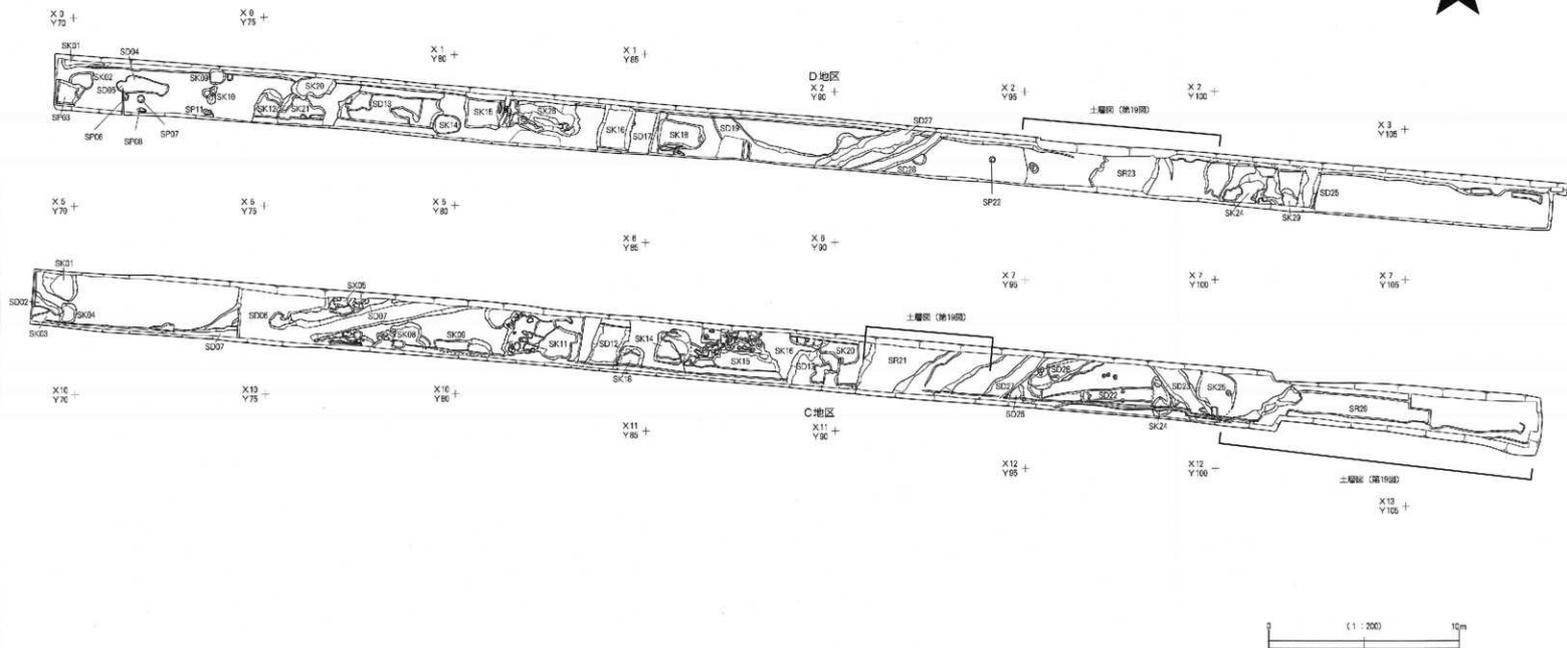
調査区東端部に位置する溝状遺構で、幅約0.8m、検出面からの深さは5cmに満たない。頭部～胴部上半にかけて、直線文・斜行短線文・扇形文で飾る弥生土器の壺(39)が遺構底面直上で出土しているが、大部分は削平により失われている。

SK15 (第7図)

SD14東側に隣接する、長径約1.7m×短径約1.0m、検出面からの深さ20cmを測る不整楕円形を呈する土坑。遺物は弥生土器(40～45)が出土しているが、細片となったものが多い。

SK16 (第7図)

SK15南側に位置する。遺構の南半部が調査区外となるため平面形状・規模は不明であるが、SK15同様に不整楕円形を呈するとみられる。検出面からの深さは25cmで、埋土には炭化物が多量に含まれている。弥生土器(46～52)がまとめて出土している。



第8图 C地区・D地区遺構配置図 (1/200)

【C地区】

SK01 (第9図)

調査区西端部に位置する。北側は一部調査区外となるが、現況で東西約1.7m、南北1.3m以上、検出面からの深さ15cmを測り、不整形を呈する。細片となっているものも多いが、弥生土器(53~61)がまとまって出土している。

SD06 (第10図)

調査区を南北に横切る溝状遺構で、調査区南壁附近でSD07と合流している。調査区北壁付近で東側へ広がるびつな形となるが、D地区SD13に繋がるものと考えられる。③・④層のSD07合流地点を中心に弥生土器(62~82)がまとまって出土している。70は無頸蓋の胴部と考えられるもので、羽状文・直線文・山形文を太い沈線で施す。80は口縁部が広がらず直線的に立ち上がる壺で、頸部以上に粗いハケ、胴部以下を細かなハケ調整とし、2種類の工具を使い分けている。

また、北壁付近の祠部から磨製石斧の基部(第43図6)が単独で出土している。柄の装着部分に至るまで全面が丁寧に研磨されており、基部中央には穿孔がみられることから、別の用途に転用された可能性がある。石材は緑色岩類と総称される(馬場2004)、長野盆地産出のものであり、栗林式の土器と共に当遺跡へ持ち込まれたものであろう。現在、県内の出土例は見当たらないが、隣県石川県の加賀市菟橋遺跡(石川県埋蔵文化財センター2004)で弥生時代中期の遺構からの出土例がある。

SD07 (第10図)

中央にSD06を挟み、南西~北東に向かってほぼまっすぐに走る溝状遺構で、調査区内では延長約14mを確認している。幅約0.8~1.4m、検出面からの深さは24~34cmを測り、低面レベルはほぼ一定である。SD06との切り合い関係は明瞭ではない。

遺物は、溝の全域から多量の弥生土器(83~129)及び凝灰岩製の剥片石器(第44図11・12)・木製有孔円盤(第45図2)が出土している。遺物の取り上げに際しては、特にSD06東側での両遺構の境界が明瞭ではないため、E-E'セクション以東の遺物をSD07出土とした。なお86のみSD06西側からの出土である。

弥生土器には壺・甕・鉢・土製円盤・土錘があり、直線文・波状文・濼状文・扇状文・斜行短線文・羽状文の各種欄挿文で器面を飾り、口縁部を櫛状具で刻むものや小波状口縁とするものが主体となる。壺類には口縁部が頸部から緩やかに開く広口壺、受口状口縁壺、細頸壺、無頸壺等があり、甕類では口縁部が強く外反しほぼ水平となるもの、く字状に緩やかに開くもの等がありバラエティーに富む。102~107は胎土に雲母を含む栗林式土器の搬入品と考えられる。

第44図11・12は、凝灰岩の扁平な板状薄片を素材とした石器で、同一固体となる可能性がある。11は一辺に研磨痕が残りの、刃部の加工が明瞭である。石包丁としての用途が推定できる。

溝の規模や出土遺物の特徴から明確な時期差を認めることはできず、弥生時代中期中葉の比較的短期間のうちに埋没した遺構とみられる。

SK09 (第9図)

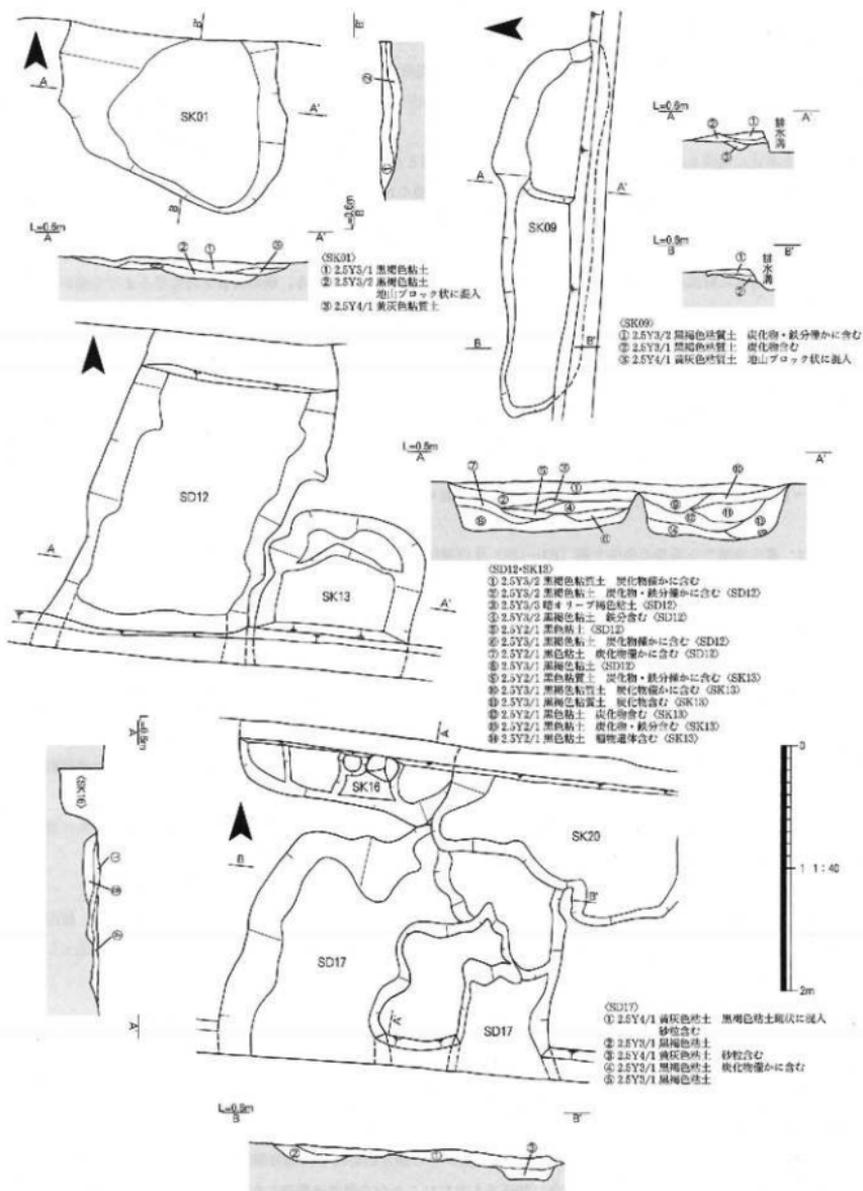
排水溝によって遺構南端部が失われているが、長軸3.1m、短軸は0.7~0.8m程度と考えられる不整形の土坑。検出面からの深さは10cm程度であり、遺構上面は削平によってかなりの部分が失われている。弥生土器(130~137)が出土している。

SD12 (第9図)

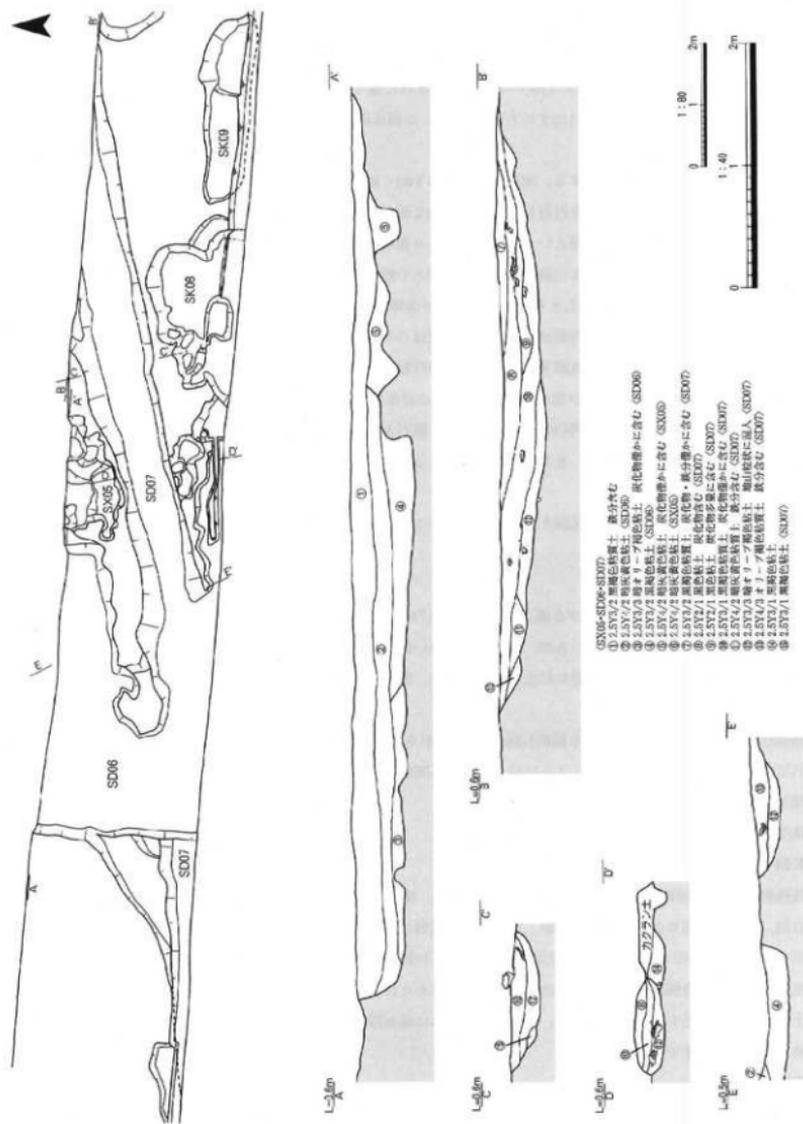
調査区に直交し、D地区SK16に繋がると考えられる溝状遺構。幅約1.6m、検出面からの深さ約40cmを測り、周囲の遺構に比して深い。弥生土器(143~149)が出土している。148は壺の胴部片であり、器面に横位の波状文を充填し垂下文を施す。胎土には雲母を含み、栗林式土器の搬入品とみられる。

SK13 (第9図)

SD12東側に位置する土坑であり、幅約1.2m、検出面からの深さ約45cmで南側は調査区外へ広がる。SD12とは10cm程度の間隔で隣限まで近接しており、切り合い関係をもたないことから両者は併存した遺構とみられる。細片となったものが多いが、弥生土器(150~158)が出土している。



第9図 C地区遺構実測図1 (1/40)



第10図 C地区遺構実測図2 (平面図: 1/80 断面図: 1/40)

S D17 (第9図)

現況で幅約0.5～1.4mを測る溝状遺構であり、北端部をSK20に切られる。遺構上面は削平によってかなり失われており、検出面からの深さが5cmに満たない部分もある。調査区外となるため南端部は確認していないが、南側を向く「コ」字状に屈曲している。東側の溝は西側に比して半分程度の幅であり、底面レベルがやや低い。弥生土器(159～168)が出土している。167は胴部上面に横位の羽状ハケ調整が施された甕であり、粟粒式土器の影響を受けたものとみられる。なお、遺構出土の弥生土器にはSR21出土の大型甕(192)の胴部破片も含まれている。

SR21 (第8・15図)

調査区の中央部やや東側に位置する、南西～北東方向を向く幅約6mの自然流路。埋土は砂粒を僅かに含む黒色粘土を主体とし、検出面からの深さは中央付近の最深部で25cmを測るが平均15cm程度と非常に浅い。両肩部の傾斜も緩やかで明確な谷状地形とはならず、自然流路というよりも周囲より僅かに標高の低い地形の落ち込みに近いものである。遺構の位置関係からはD地区SR23に繋がる可能性があるが、深さや断面形状、埋土の地層状況は大きく異なる。

遺物は弥生土器(169～192)、砥石と考えられる礫片が遺構中央部から集中して出土している。192は胴部最大径17.5cm、器高は55cm以上となる大型の壺。内面は密なハケ、外面はハケ調整後にミガキが施される。口縁端部に上下から櫛状貝を用いた刺突文を施し、頸部を柳指直線文、L線内面を斜行短線文で飾る。175は蓋とみられ、器面に斜行短線文を充填し、焼成前に外面から2孔一對の穿孔が施される。178は壺の肩部片と考えられる。横位の平行波線間に列点文を充填し、下部には縦位の列点文を施す。第44図13は円礫を利用した砥石とみられ、実測図左側部分に明確な面を持ち、擦痕が観察できる。外面には煤が付着している。また、遺構外ではあるが、管玉の形割未成品と考えられる緑色凝灰岩片(第44図2)が西肩部付近から出土している。

出土した弥生土器がSD17、SK24と接合関係にあることから、地形の落ち込みを利用した、両岸部からの遺物廃棄場としての性格が想定できる。

SD22 (第11・12図)

ほぼ調査区に添う形で東西に伸びる溝。現況で幅約0.7m、検出面からの深さは10cm前後で、底面レベルはほぼ一定である。東側にはSK24が隣接しているが、遺構の切り合い関係は明瞭ではない。西側はSD26付近で南側に僅かに屈曲し溝壙区外へ伸びる。弥生土器片が僅かに出土しているが、図示できるものはない。

SD23 (第11図)

調査区を南東～北西方向に横切る幅約1.3m、検出面からの深さ約10～15cmの溝状遺構で、SK24を切り、SK25に切られている。削平の影響もあり掘り込みは浅く肩部は不明瞭である。埋土は黒褐色粘土を主体とするが、底面附近に炭化物塊が沈殿する部分が見られる。

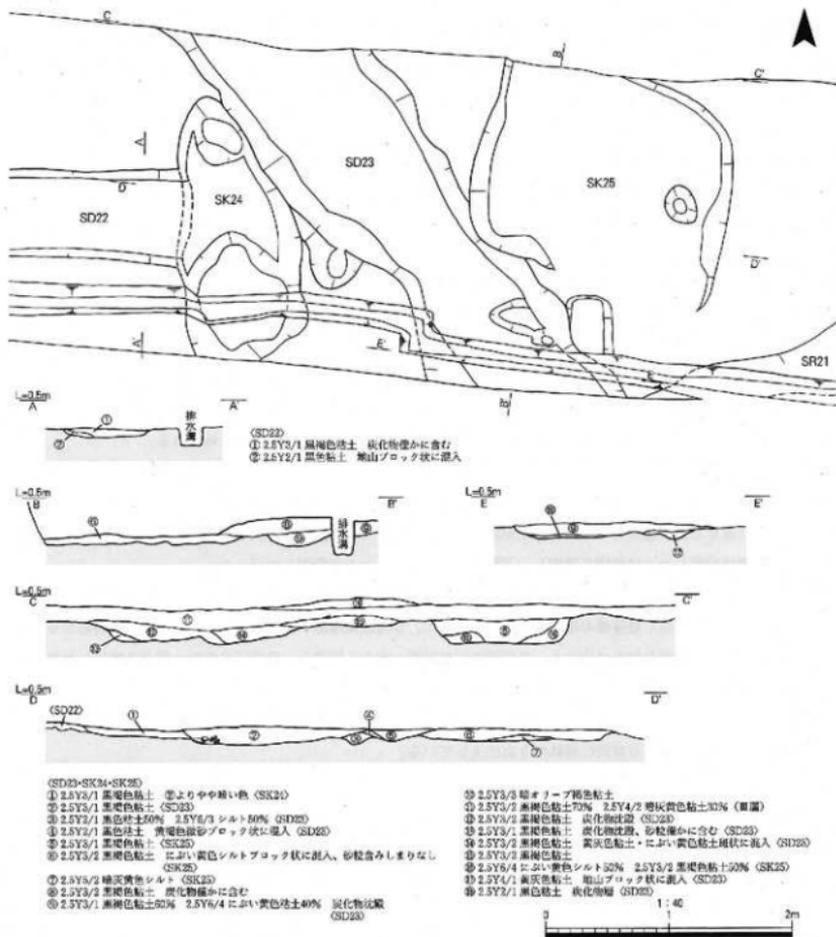
弥生土器(193～202)がまとめて出土している。

SK24 (第11図)

長径約2.2m×短径約1.0mの不整楕円形を呈する十坑。検出面からの深さは3～20cmを測り、南半部は一段深くなる。SD22、SD23と切り合い関係にあるが、SD22との境界は明瞭ではない。南半部から弥生土器(203～209)がまとめて出土している。203は口縁端部を櫛状貝で刻み、胴上半部には竹管状具で下方に開く4条以上の弧文を施す甕で、SR21出土の土器と接合関係にある。胎土は在地のものと考えられるが、系統は判然としなない。粟粒式土器やいわゆる沈線文系土器の系統を想定すべきであろうか。なお、外面全体に煤が厚く付着するが、断面にも煤の付着が認められ、焼成後に被熱したことが確認できる。

SK25 (第11図)

SD23東側に隣接する土坑で、約2.1m×1.8mの隅丸方形を呈すると考えられる。調査区北壁付近以外は掘り込みが浅く、南端部は確認できなかった。弥生土器片が僅かに出土しているが細片となったものが多く、210の甕L線部以外図示できるものはない。他に安山岩製の有蓋石鏝(第44図4)が1点出土している。



第11図 C地区遺構実測図3 (1/40)

SD26 (第12図)

SD22西側に位置する。幅1m前後の溝状遺構と考えているが、調査区内では遺構の北端部を確認したのみであり、遺構の規模・性格等は不明である。調査区南壁の土層観察では、SD22と隣接するものの切り合い関係は認められない。SD22が北側に屈曲するコーナー部分となる可能性もある。遺物は出土していないが、周辺の遺構とほぼ同時期とみられる。

SD27 (第12図)

S R21の東側に並行する幅約0.9m、検出面からの深さ10cmの溝で、調査区内では延長3.5mを確認している。底面レベルはほぼ一定である。溝の全域から多量の弥生土器(211~234)が出土している。

弥生土器には壺・甕・鉢・土製円盤があり、直線文・波状文・斜行短線文・羽状文の各種飾描文で器面を飾り、口縁端部を棒状具で刻むものや小波状口縁とするものがみられる。213は受口状口縁の壺で、口縁部は縄文を充填した後に山形沈線文を施し、頸部は二条の平行沈線で区画した中に縄文を充填している。栗林式系統の土器とみられるが、胎土は在地産のものに近い。石川県小松市の八日市地方遺跡(小松市教育委員会2003)でも類品が出土している。

SD28 (第12図)

SD27東側に隣接する溝状遺構。調査区中央部で南側に屈曲し、SD22とは合流せず完結する。幅約1.1mで、屈曲部から北壁へ向かって段階的に深くなり、底面レベルの比高差は最大で40cmとなる。遺物は西肩部から⑦層にかけて弥生土器(235~243)がまとまって出土している。⑩・⑪層が堆積した後に投棄されたものとみられる。

SR29 (第8・15図)

C地区東端に位置する自然流路。E地区SX03が東肩部と考えられ、流路幅は22m前後と推定している。調査の際にはかなりの深度に達すると予想されること、湧水が激しいことに加えて調査区の幅が狭く崖面崩落の危険性があったため、流路西側の遺構検出面レベルで範囲を確認し、下層確認はサブトレンチを設定して行った。

埋土は砂粒を含む粘土層が主となり、⑦層以下⑩層にかけて徐々に植物遺体の密度が高くなる。⑩層で湧水が激しくなったため、以下の掘削を断念し最深部の確認には至らなかった。D地区東端部やF地区西部では、SR29に対応する流路が確認できないため、直線的な流れではなく、北側調査区外で西へ大きく屈曲し、D地区SR23へ繋がる蛇行した流路となる可能性が高い。

遺物は④~⑦層にかけて弥生土器(244~250)が出土している。土器は弥生時代中期に属するものが中心となるが、西肩部では弥生時代後期に属する有段口縁鉢が3点出土している。

【D地区】

SK01 (第13図)

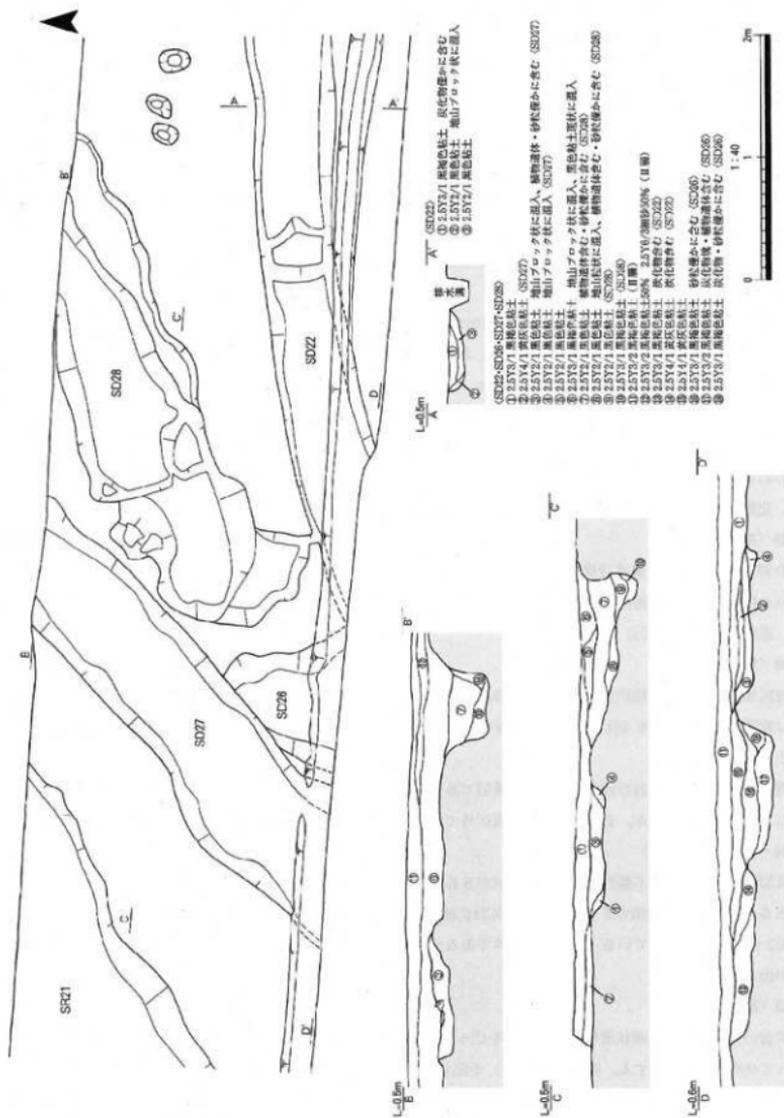
調査区西端部に位置し、北側は調査区外となるため平面形態・規模は不明である。確認している部分では、東西約2.6m、検出面からの深さ40cmを測る。埋土は黒褐色粘土を主とし、②・③層には炭化物が多量に含まれている。弥生土器(251~256)が出土している。255・256は同一個体で、外面に縄文を施し平行沈線を引き、在地の土器とは胎土・調整共に異なるが、今回の調査で出土している他の栗林式系統の土器と比較すると胎土において差異が認められる。なお、同一個体とみられる土器片がSK02からも出土している。

SK02・SK03 (第13図)

S K01南側に位置する土坑で、SK02がSK03を切る。SK02は長径約1.2m×短径約0.9mの不整形を呈し、SK03は南西部が調査区外に広がる。SK03はSK02よりも一段深く掘り込まれている。弥生土器(SK02:257~259、SK03:260)が出土している。259はSK01出土の255・256と同一個体と考えられる。

SK09 (第13図)

径約0.9mの不整形を呈する土坑。検出面からの深さが約70cmと平面規模に比して深い。埋土には植物遺体や炭化物塊が多量に含まれ、弥生土器片(261~265)が出土している。底面が湧水層まで掘り込まれており、湧水が非常に激しい。



素掘りの井戸と考えられるが、E地区では同様の遺構から中世期の遺物が出土しているため、弥生時代の遺物包含層を掘り抜いた中世段階の遺構となる可能性も否定できない。

SK14 (第13図)

長径約1.5m×短径約1.0mの楕円形の上坑で、SD13を切る。削平により深さは5cmに満たないが、埋土には炭化物を多量に含み、弥生土器(272~276)がまとまって出土している。弥生土器には壺・甕がみられるが、器面を御描文で飾るものは含まれず、施文は1緑端部のキザミや刺突文、口縁部内面の羽状文に限られている。

SK16 (第13図)

調査区の中央部に位置する土坑。幅約1.7m、検出面からの深さ約40cmを測る。弥生土器(278~280)が出土している。調査区北壁付近で遺構断面を確認したため土坑として取り扱ったが、遺構の規模・形状等がC地区SD12に類似し、位置的にもこれに繋がる可能性がある。280は器面に懸垂文を施す甕の底部付近と考えているが、壺の頭部となる可能性もある。栗林式土器の影響を受けたものであろう。なお、SX26からも同一固体の破片が出土している。

SD19・SD27 (第14図)

調査区中央部付近に位置する溝状遺構。SD19は幅約1.0~1.2、検出面からの深さ5~10cmを測り、東端でSD27に合流する。弥生土器(282~284)が出土している。284は胴部がソロバン玉状になる小型の壺で、口縁部内面に垂下文、外面を直線文・波状文・籠状文・斜行短線文で飾り、胴部・底部境界にキザミを施す。東海地方の貝田町式土器の影響を受けたものと考えられる。SD27は調査区を南西~北東方向に横切る溝状遺構で、幅約0.7~1.1m、検出面からの深さ25cmを測る。弥生土器(285~287)が出土している。

SD27はSD19より一段深くなっているが、切り合い関係は認められない。位置関係からも両者の関連性が伺えることから、北側に開く弧状の溝状遺構として捉えるべきと考えられる。

SD28 (第14図)

SD27東側に並行する溝状遺構で、幅約0.6m、検出面からの深さは10cm前後である。SD19・SD27を同一の遺構としてみた場合、遺構が直線的に伸びるとすれば、やや距離はあるがC地区SD07と方向が一致し、これに繋がる可能性がある。弥生土器(288~291)が出土している。

SR23 (第8・15図)

調査区東部に位置する幅約11.5mの自然流路。両岸部の傾斜は緩やかで、検出面からの深さは最深部で約70cmとなる。埋土は軟質の黒褐色粘土を主体とし、④~⑥層にかけて弥生土器(298~309)及び緑色凝灰岩製の青木未製品(第44図1)が出土している。

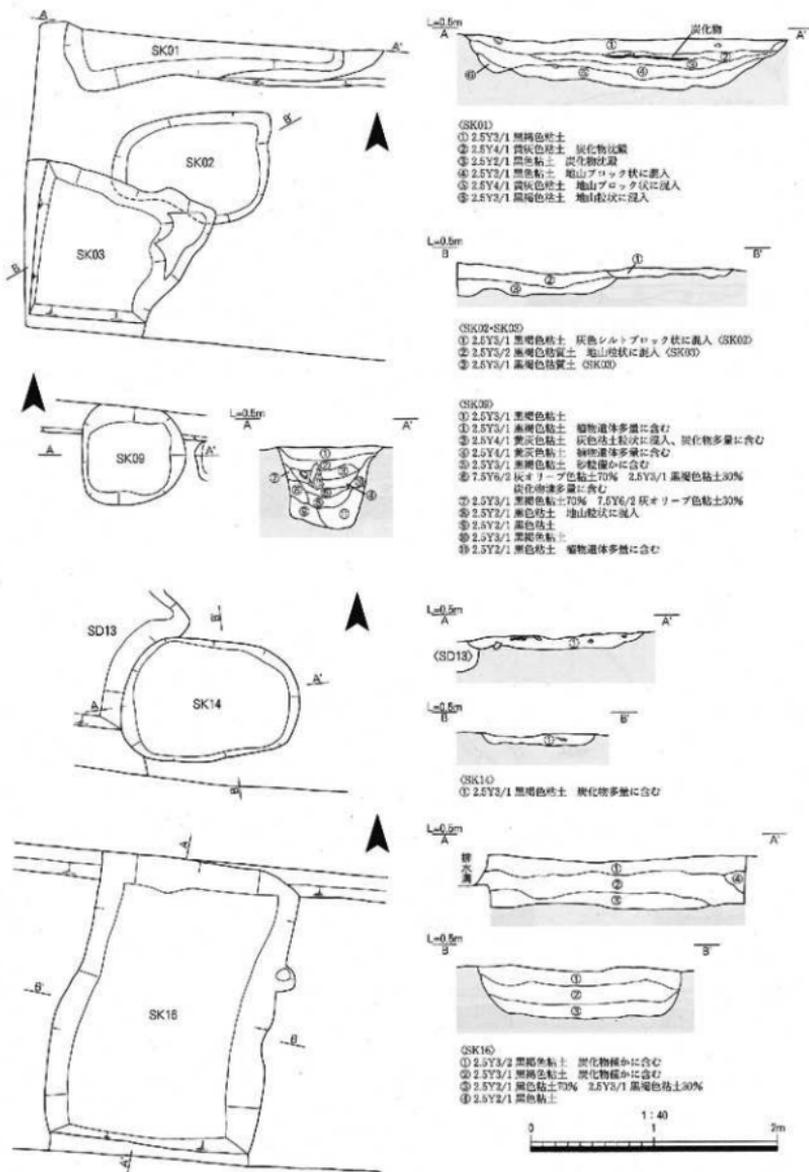
位置的にはC地区SR21の延長とみるのが妥当であるが、先にも述べたとおりSR21とは深さ・断面形状・埋土の堆積状況において大きく異なる。また、C地区調査区外で西側に屈曲したC地区SR29がこれに繋がると思われる。

SK24・SK29 (第14図)

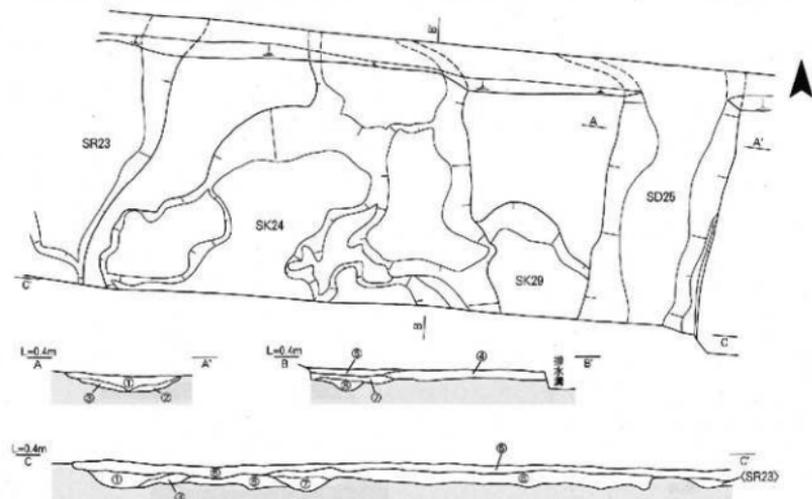
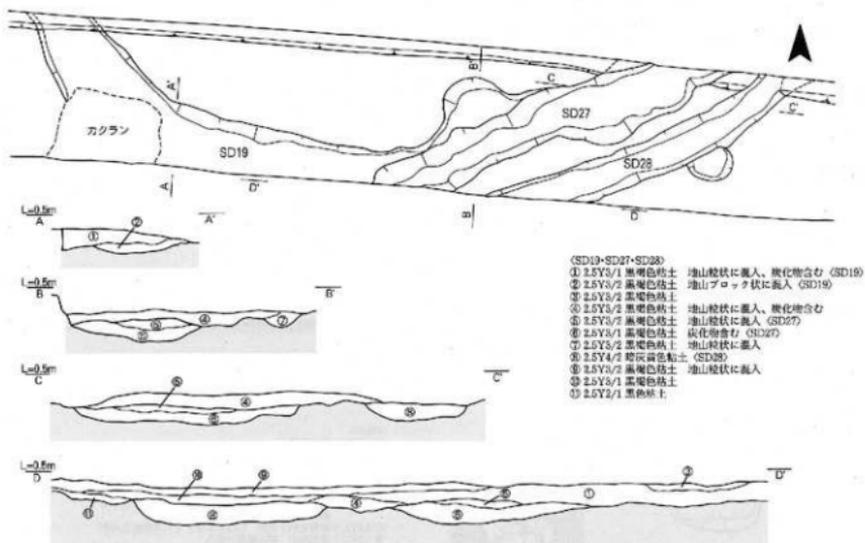
SR23東側に位置する不整形の遺構。SK24がSK25を切っている。削平により検出面からの深さが5cmに満たない部分もある。埋土は黒褐色粘土を主体とし、SK24北部の④層中には炭化物塊が含まれる。弥生土器(SK24:310 SK29:312~314)が出土している。また、遺構外であるが、付近から管玉の形制未成品と考えられる緑色凝灰岩片(第44図3)が出土している。

SD25 (第14図)

SK29の東に隣接する溝状遺構で、SK29を切っている。幅約1.0m、検出面からの深さ20cmで調査区北壁付近で西へ向かってほぼ直角に屈曲する。弥生土器(311)や図示していないが板状の木片が出土している。



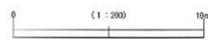
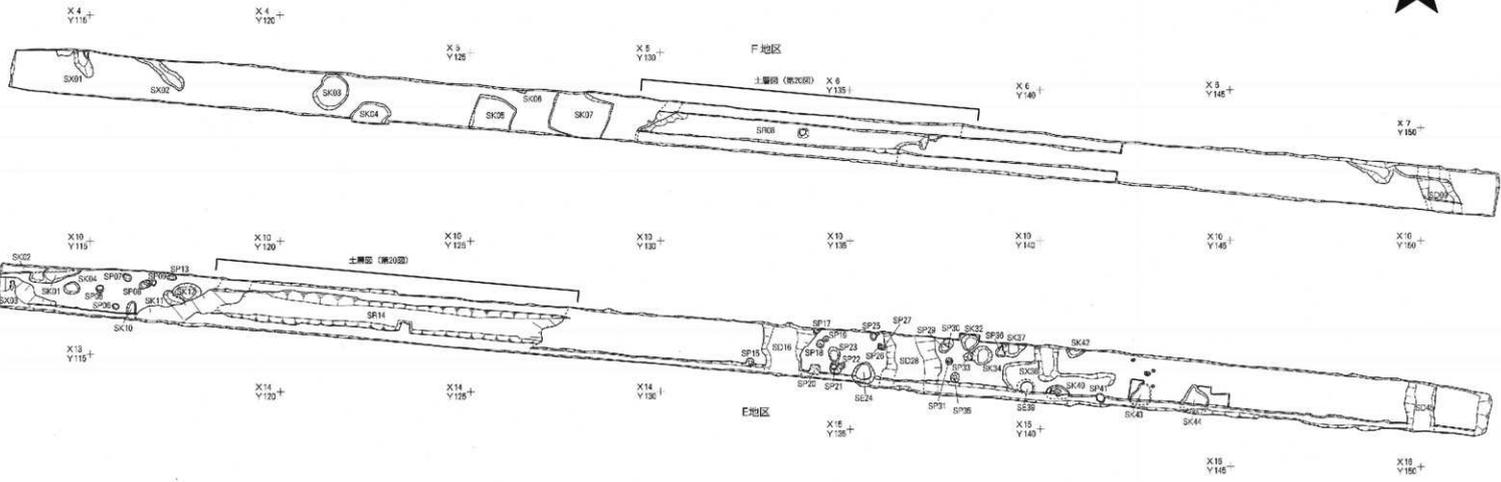
第13図 D地区遺構実測図1 (1/40)



- (SR23-SK24-SK29)
- ① 2.5Y3/2 黒褐色粘土
② 2.5Y3/2 黒褐色粘土
③ 2.5Y3/2 黒褐色粘土
④ 2.5Y3/2 黒褐色粘土
⑤ 2.5Y3/2 黒褐色粘土
⑥ 2.5Y3/2 黒褐色粘土
⑦ 2.5Y3/2 黒褐色粘土
⑧ 2.5Y3/2 黒褐色粘土
⑨ 2.5Y3/2 黒褐色粘土
⑩ 2.5Y3/2 黒褐色粘土
⑪ 2.5Y3/2 黒褐色粘土
- 砂粒多く含む (SD25)
油山ブロック状に混入 (SD25)
油山段状に混入 (SD25)



第14図 D地区遺構実測図2 (SD19・SD27・SD28平面図:1/80 その他:1/40)



第15圖 E地区・F地区遠構配置圖 (1/200)

【E地区】

SK01・SK02 (第16図)

調査区西端部に位置する土坑で、北半部は調査区外に広がる。SK01は検出面からの深さ25cmを測り、弥生土器(315~319)が出土している。SK02は検出面からの深さ13cmを測り、弥生土器(320)が出土している。SK02は東西方向の溝状遺構となる可能性がある。

SK03 (第16図)

調査区西端部で南西に緩やかに傾斜する自然地形。弥生土器(351~353)が出土している。C地区SR29の東岸部と考えられる。

SK04 (第16図)

長径約0.8m×短径約0.7m、検出面からの深さ19cmを測る楕円形の上坑。弥生土器(321・322)が出土している。

SK11・SK12 (第16図)

SR14の西岸部に位置する。SK11は東半部をSK12に切れ、現況で長径約1.2m、検出面からの深さ10cmを測る。弥生土器(323~326)が出土している。SK12は長径約1.5m×短径約1.0m、検出面からの深さ24cmを測る。弥生土器(327~332)が出土している。

SR14 (第15・20図)

調査区西半の大部分を占める、南西~北東方を向く自然流路。両岸から中央部にかけて緩やかに傾斜し、流路幅約19m、検出面からの深さは最深部で約1.7mを測る。埋土は、下層部に厚く堆積する砂層(㉑~㉒層)と上層部のシルト層(㉓~㉔層)に大別され、下層では明瞭な流水堆積が確認できる。㉒層以上の上層部を中心に弥生土器(354・355)が出土している。

堆積状況や出土遺物から、弥生時代中期以前には安定した河川として存在したことが伺える。その後、西側の砂層部分が先行して埋没し、弥生時代中期~後期頃にかけては、㉓~㉔層部分のやや幅を狭めた緩やかな流れとして残り、段階的に埋没していったものと考えられる。

SP20・21・22・23 (第17図)

SD16東部に位置する小穴群。SP20は径約0.5mの方形を呈するとみられ、柱根とみられる木片が西側に傾いた状態で残る。SP21・22・23は規模の差はあるがそれぞれ円形を呈し、SP21がSP22・23に切られている。SP21では径17.4cmの断面円形を呈する柱根がほぼ直立状態で残る。SP23からは弥生土器(347)及び緑色凝灰岩の剥片が出土している。

SE24 (第17図)

SD28西側に隣接する径約1.2mの円形を呈するとみられる井戸。検出面からの深さは74cmを測り、断面形状は下部でややオーバーハングする袋状を呈する。遺構下部から中世土器器皿の破片及び曲物の底板(第45図3)が出土している。

SD28 (第17図)

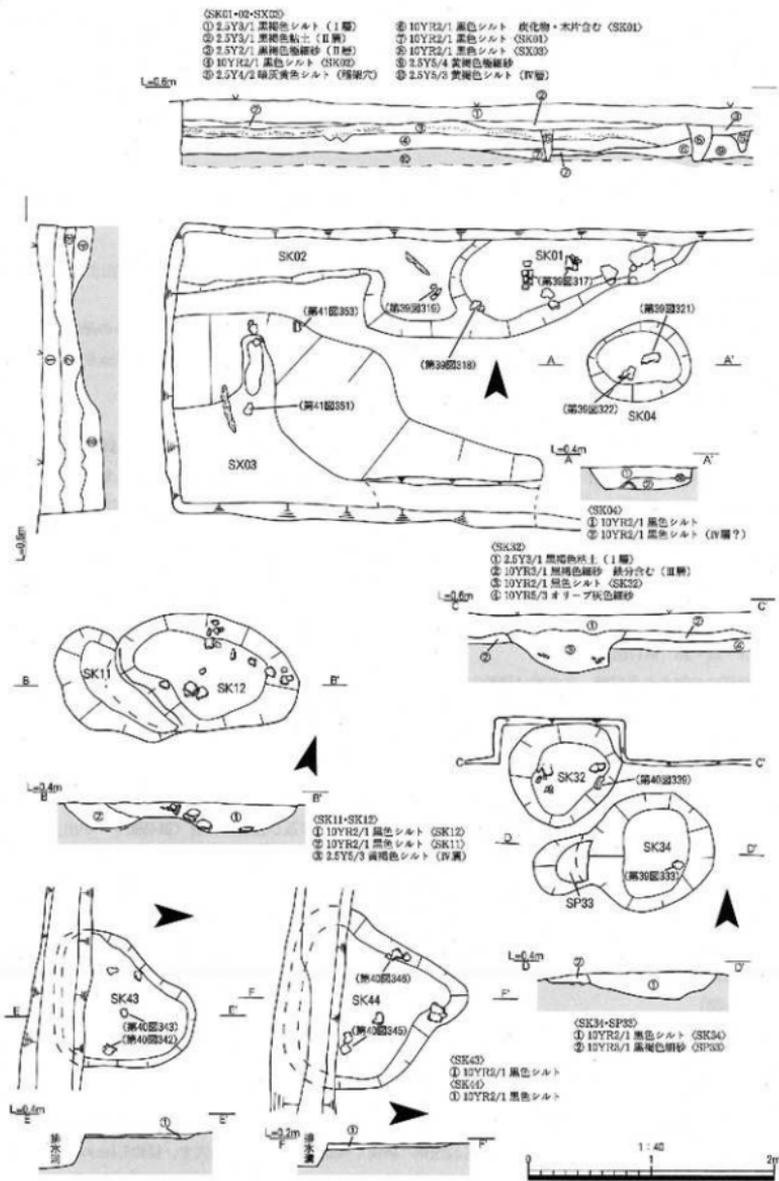
上述の小穴群東方に位置し、調査区に直交する溝状遺構。幅約2.6m、検出面からの深さ22cmを測り、西側に比較して東岸部は緩やかに傾斜する。遺構東岸部を中心に弥生土器(364~375)がまとまって出土している。弥生土器には罎・甕・鉢・高坏?があり、直線文・螺旋文・三角形刺突文・羽状文等の櫛描文で器面を飾り、口縁端部を櫛状具で垂直又はX字状に刻むものや小波状口縁とするものがみられる。

SK32 (第16図)

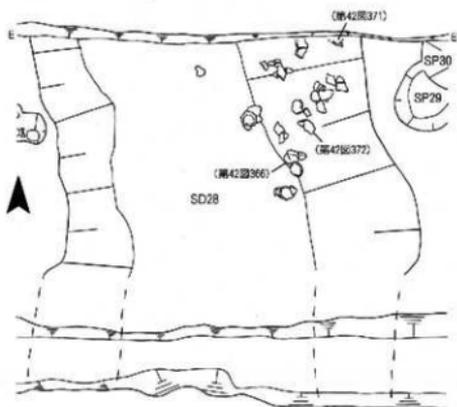
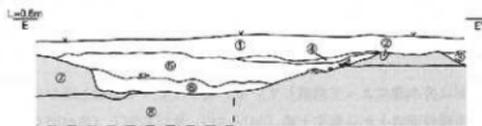
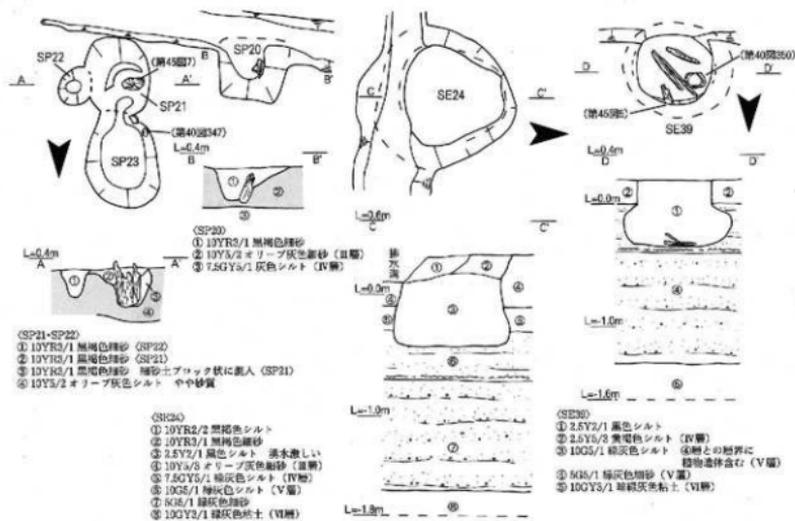
SD28東部に位置する、長径約0.9m×短径約0.8m、検出面からの深さ35cmを測る上坑。弥生土器(334~339)が出土している。

SK34・SP33 (第16図)

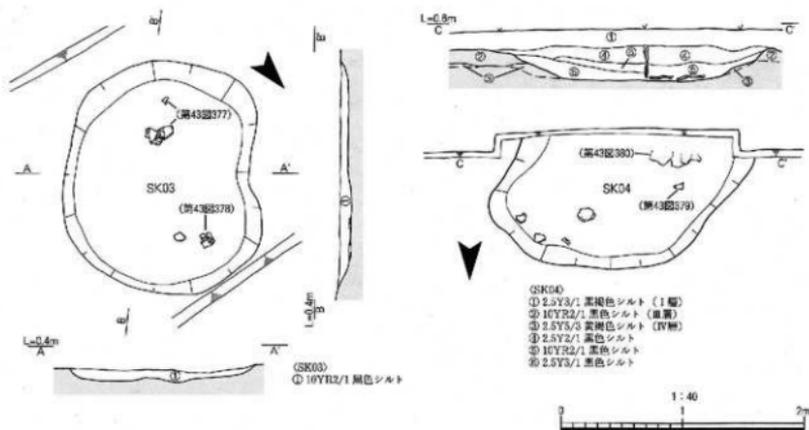
SK32の南に隣接する。SK34は長径約1.1m×短径約0.9m、検出面からの深さ22cmを測る不整形の土坑で、埋土から弥生土器(333)が出土している。SP33はSK34西側に隣接し同遺構に切られる小穴で、径約0.4mの円形を呈する。遺物は出土していない。



第16図 E地区遺構実測図1 (1/40)



第17図 E地区遺構実測図2 (1/40)



第18図 F地区遺構実測図 (1/40)

S E 39 (第17図)

S D28東方に位置する径約0.6mのほぼ正円形を呈する井戸。検出面からの深さは54cmを測り、断面形状は下部でオーバーハングする袋状となるが、湧水の影響による壁面崩落の可能性が高い。底面直上から珠洲焼の壺底部(350)及び井戸枠等の部材とみられる板状木製品(第45図5)が出土している。

S K 43 (第16図)

調査区東部に位置する不整形の土坑で、遺構南端部は排水溝によって消滅している。削平によって遺構上部がかなり失われており、検出面からの深さは5cmに満たない。遺構底面直上から弥生土器(341~343)及び石包丁(第44図9)が出土している。石包丁は頁岩製で、両側からの穿孔が確認できる。E地区では、この他にも1点石包丁(第44図10)が遺物包含層から出土している。こちらは凝灰岩製で、刃部が緻密に研磨されており、使用に伴うとみられる細かい剥離が確認できる。

S K 44 (第16図)

S K43東部に位置する不整形の土坑で遺構南端部は排水溝によって消滅している。検出面からの深さは最深部で10cm程度であり、削平によって遺構上部がかなり失われている。遺構底面直上から弥生土器(344~346)が出土している。

【F地区】

S K 03 (第18図)

調査区東方に位置する、長径約1.9m×短径約1.5mの不整形形を呈する土坑。検出面からの深さは最深部で10cm程度であり、削平によって遺構上部がかなり失われている。遺構底面直上から弥生土器(376~378)が出土している。

S K 04 (第18図)

S K03東部に隣接する不整形の土坑で、遺構南半部は調査区外へ広がる。検出面からの深さ30cmを測り、遺構底面直上から弥生土器(379~381)が出土している。

S R 08 (第15・20図)

調査中央部に位置する、F地区S R14から続く自然流路。流路幅約14m、検出面からの深さは最深部で約1.3mを測り、弥生土器(356~358)が出土している。356は、器面を4重の「ハ」字状沈線文と円形竹筴状文を施した円形浮文で飾る壺の胴部で、栗林式又は沈線文系土器の影響を受けたものとみられる。

第4章 作道遺跡出土遺物の年代測定

1. はじめに

作道遺跡E地区の調査では、遺構及び遺物の年代に関する情報を得るために、出土遺物を用いて放射性炭素年代測定を実施した。分析はバリノ・サーヴェイ株式会社へ委託し、バリノ・サーヴェイ株式会社、(株)中部日本鉱業研究所により今回の報告を取りまとめた。

2. 試料および分析

試料及び分析法は以下のとおりである。S P17とS P21で出土した柱根は、前者が辺材付近から、後者が心材付近から試料を採取し、 β 線計数法を用いた。S K32とS D28で出土した土器は、外面に付着した煤を採取し、試料が微量であるため、AMS法を採用した。

β 線計数法は以下の行程で分析する。試料表面の汚れをピンセット、超音波洗浄など等により物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムなどを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する。試料中に含まれる炭素を酸化させて二酸化炭素とし、さらに精製ラインを用いて、二酸化炭素からアセチレンを合成する。 β 線計数装置の気体比例計数管で、 ^{14}C の崩壊数を計測する。測定が終了したアセチレンガスから再び二酸化炭素を作製し、安定同位体比測定用質量分析装置で試料中の $\delta^{13}\text{C}$ を測定する。

土器付着炭化物では、得られる炭素の量が数ミリグラムから数十ミリグラムと微量である。この微量な試料でも分析を可能する方法がAMS法である。AMS法は以下の行程で分析する。土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等可溶成分の除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C(30分)850°C(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装荷し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HIOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

β 線計数法とAMS法では、分析に用いることができる試料の分量に違いがあるだけで、分析精度に差を生じない。

3. 分析結果

年代測定結果と暦年較正結果は、第2表と第3表に示すとおりである。各試料の年代は、S K32とS D28の試料が弥生時代中期中葉頃に、S P17が弥生時代前期前葉頃、S P21が弥生時代前期後葉頃を示す。S P17とS P21の年代値については、試料採取地点周辺で検出・出土した遺構・遺物の考古学的な年代観との差が大きいため、この結果の扱いに十分な検討が必要であろう。

放射性炭素年代測およびその年代値の確定には、試料のもつ性格も加味しておく必要がある。木材で決定される年代は、あくまで樹木自体の年代であるため、建築物や木製品の制作・使用年代を決定するものではない。枯死や伐採されて時間が経過してから使用されたもの、別の用途から再利用されたものでは、年代値を古く示す。補修のために追加されたものや、表面を削ったものは、年代値を新しく示す。また、柱根資料については、木材の生育順序から辺材と比較して心材試料の方が古い測定値を示し、辺材部は、より伐採年代に近い値を示しているといえる。こうした点から、今回の柱根資料を用いた年代値の扱いには注意が必要である。一方、土器の付着炭化物に関しては、煮炊きに伴う被熱や破損等、実際の使用に伴う痕跡を示すものとみられるため、土器製作に比較的近い年代値を示すといえる。

県内では、依然として弥生時代前・中期の資料の蓄積が十分ではない。今後、考古学的な手法による年代観を構築するとともに、理化学年代測定による分析データとの相互補完を図り、その中で今回の結果と検出・出土した遺構・遺物を比較・検討していくべきであろう。

第2表 放射性炭素年代測定結果

試料採取遺構名	試料名	補正年代(BP)	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代(BP)	Code.No.
F地区 SP17	柱根(トネリコ属)	2,680 ± 90	-29.7		IAA-917
F地区 SP21	柱根(ヤマグラ)	2,350 ± 100	-31.1		IAA-918
E地区 SD28	土器付着炭化物	2,180 ± 40	-28.73 ± 0.95	2,210 ± 30	IAAA-51822
F地区 SK32	土器付着炭化物	2,170 ± 30	-26.92 ± 0.92	2,200 ± 30	IAAA-51823

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第3表 暦年校正結果

遺構名	補正年代(BP)		暦年校正年代(cal)								相対比	Code No.				
			σ	cal	BC		cal	BC		cal			BP		cal	BP
SP17	2685 ± 88	σ	cal	BC	971	-	cal	BC	960	cal	BP	2,921	-	2,910	0.042	IAA-917
			cal	BC	935	-	cal	BC	787	cal	BP	2,885	-	2,737	0.958	
		2 σ	cal	BC	1,110	-	cal	BC	1,103	cal	BP	3,060	-	3,053	0.002	
			cal	BC	1,076	-	cal	BC	1,065	cal	BP	3,026	-	3,015	0.004	
			cal	BC	1,056	-	cal	BC	733	cal	BP	3,006	-	2,683	0.914	
			cal	BC	691	-	cal	BC	661	cal	BP	2,641	-	2,611	0.023	
SP21	2351 ± 104	σ	cal	BC	745	-	cal	BC	688	cal	BP	2,695	-	2,638	0.149	IAA-918
			cal	BC	664	-	cal	BC	646	cal	BP	2,614	-	2,596	0.044	
		2 σ	cal	BC	551	-	cal	BC	355	cal	BP	2,501	-	2,305	0.675	
			cal	BC	288	-	cal	BC	233	cal	BP	2,238	-	2,183	0.131	
			cal	BC	769	-	cal	BC	201	cal	BP	2,719	-	2,151	1.000	
			cal	BC	133	-	cal	BC	117	cal	BP	2,083	-	2,067	0.022	
SD28	2178 ± 35	σ	cal	BC	354	-	cal	BC	290	cal	BP	2,304	-	2,240	0.593	IAAA-51822
			cal	BC	231	-	cal	BC	180	cal	BP	2,181	-	2,130	0.407	
		2 σ	cal	BC	372	-	cal	BC	159	cal	BP	2,322	-	2,109	0.978	
			cal	BC	133	-	cal	BC	117	cal	BP	2,083	-	2,067	0.022	
			cal	BC	352	-	cal	BC	295	cal	BP	2,302	-	2,245	0.562	
			cal	BC	229	-	cal	BC	220	cal	BP	2,179	-	2,170	0.057	
SK32	2167 ± 32	σ	cal	BC	211	-	cal	BC	171	cal	BP	2,161	-	2,121	0.381	IAAA-51823
			cal	BC	361	-	cal	BC	271	cal	BP	2,311	-	2,221	0.475	
		2 σ	cal	BC	254	-	cal	BC	148	cal	BP	2,214	-	2,098	0.474	
			cal	BC	140	-	cal	BC	112	cal	BP	2,090	-	2,062	0.051	
			cal	BC	352	-	cal	BC	295	cal	BP	2,302	-	2,245	0.562	
			cal	BC	229	-	cal	BC	220	cal	BP	2,179	-	2,170	0.057	

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用

2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年校正曲線や暦年校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4)統計的に真の値が入る確率は σ は68%、2 σ は95%である。

5)相対比は、 σ 、2 σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第5章 総括

1 弥生時代中期の土器について

今回の調査では、弥生土器が多く出土し、特に弥生時代中期に属するものが全体の9割以上を占めている。また、遺物の大部分が遺構出土資料であるため、資料数がまだ十分ではない、富山県内における弥生時代中期の様相を知る手がかりとして良好な資料となるものと思われる。ここでは調査のまとめとして、作道遺跡出土弥生土器の位置付けについて検討してみたい。

出土遺物を概観すると、櫛描文系の土器を中心に、粟林式土器の搬入品やその影響を受けたものを客体的に含む構成となっている。遺構単位で見ると、各種櫛描文で器面を飾る土器が一定量含まれるもの（1群）、器面に櫛描文を施すものが稀で、装飾の少ないもの（2群）と大まかに2つの様相に分類できる。調査区幅が狭いため、遺構の全形が判明するものは少なく、また遺構によっては大半が調査区外となり、器種構成が不明なものも含まれているが、自然流路を除けば長期に渡って継続したような遺構は少ないと見られることから、この2群を遺構単位での時期差と推定した上で検討してみたい。

1群ではC地区SD07が最も遺物の出土量が多く、器種も豊富である。器種には壺・甕・鉢があり、粟林式土器の搬入品と考えられる土器が6点含まれている。甕類では口縁部が強く外反しほぼ水平となるものや、「く」字状に緩やかに開くもの等がある。壺類には口縁部が頭部から緩やかに開く広口壺を主体とし、受口状口縁点、細頸壺、無頸壺等が含まれる。口縁部の装飾は、櫛状具によって口縁端部を刻むものや、口縁上方からの押圧による小波状口縁とするものが主体となり、甕、壺共に採用されている。器面を飾る櫛描文には、直線文・波状文・麻状文・斜行短線文・扇形文・羽状文の各種櫛描文が描かれ、複合構成のものが中心となる。装飾部位は、外面は頸基部から胴部上半を加飾し、口縁部内面に羽状文・斜行短線文を施すものが多い。

他の遺構では、A地区SX03、C地区SD12、SK24、SD27、E地区SK12、SD28等がこれに近い様相を示す。

2群にはB地区SK15・16、C地区SD28、D地区SK14、F地区SK04・05等の資料が挙げられる。甕類は口縁部が強く外反するものは見られなくなり、口縁部の装飾は、櫛状具によって口縁端部を刻むものや刺突文が主体となる。指頭押圧によって波状口縁とする(236)の1点を除いて他は平縁となり、小波状口縁のものは見られない。外面の櫛描文も(43)の1点を除いて施されていない。

この1・2群の差異は、櫛描文の盛行から衰退という流れの中で捉えることができよう。富山県内では、当期の遺跡として高岡市石塚遺跡、上市町放土ヶ瀬北遺跡、立山町蒲田遺跡等が知られており、調査件数も多く、資料の充実した石塚遺跡出土資料を中心に編年案が示されている(上野1976・岡田2001)。1群の特徴である櫛描文の盛行や口縁上方からの押圧による小波状口縁の存在は、上野章氏編年のⅡ期、及び岡田一広氏編年の石塚遺跡第3期に比定できよう。櫛描文が衰退する2群はそれぞれ1段階新しく、上野章氏編年のⅢ期、及び石塚遺跡第4期に併行すると考えられる。隣県石川県との併行関係を見ると、1群は福海貴子氏による小松市八日地方遺跡の8期(福海2003)及び増山仁氏編年の4期(増山1989)にあたる小松式期に、2群は八日地方遺跡の9期及び増山仁氏編年の5期、磯部式期にそれぞれ並行するものと考えられる。

現在でも県内における弥生時代中期の遺跡の調査例は少なく、石塚遺跡の編年を中心としつつも比較的資料に点まれた石川県の編年に依拠する部分が多い。しかし、石川県内でも加賀・能登などの地域差が生じており、まして富山県内では、弥生時代中期から後期への移行期を櫛描文の衰退及び凹線文を持つ西日本系土器の出現と定着を指標とする、石川県以西の編年に準拠しない部分が多い。今回、作道遺跡出土の弥生時代中期の土器を1・2群に大別したが、中には時間的に前後する様相をもつものも含まれていると思われる。また、今回比較対象としなかった遺構や、粟林式土器との並行関係についても詳細に検討する必要がある。今後、県内での資料の増加を待ち、粟林式土器をはじめとする東日本との併行関係も視野に入れつつ、富山県内における体系的な編年を構築することが課題となろう。

2 調査のまとめ

今回の調査は、東西に細長い調査区の設定となったため、遺構配置等を平面的に捉えることはできなかったが、全調査区で弥生時代中期を中心とする遺構・遺物を確認し、遺跡の東西方向の範囲を推定することができた。

遺構はC・D地区で最も密度が高く、A・B地区間、C・D地区東部及びE・F地区中央部に自然流路が存在する。流路からの出土遺物は弥生時代中期が中心となり、周辺遺構の存続期間と重複する部分が多く、河川によって複数に分断された遺跡の様子が伺える。

過去の調査成果と照合すれば、A地区西側に近接する高島A遺跡との間に遺構の空白が認められないことから、両者が同一の遺跡となることはほぼ確実とみられる。東側では、E・F地区の東側に自然流路跡が確認されており、その東方に位置する、平成5年度の試掘調査区で弥生時代中期の遺構の広がり確認されていることから、作道遺跡・高島A遺跡を併せた東西の遺構分布範囲はおおよそ800mと推定できる。南北の状況については現時点では明らかではないが、過去の分布調査では遺跡範囲の中央部～南端にかけて遺物の分布密度が高くなっている。遺構の形状や性格が判明したものは少ないが、比較的整った長方形を呈するA地区S X03は、その形状や西側に近接する高島A遺跡で確認された弥生時代中期後半の方形周溝墓の存在から、何らかの埋葬施設としての性格が伺え、周囲に墓域の存在が推定できる。C・D地区以東は、出土遺物の量から居住域の一角に当たるとみられ、遺跡範囲の東端部まで河川を跨いで集落域が形成されていたと思われる。

作道遺跡は弥生時代中期のうちに集落遺跡としての機能を失う。隣接する高島A遺跡では、弥生時代中期から古墳時代中期まで遺跡の存続が確認できることから、弥生時代後期以降、作道遺跡を営んでいた人々は、集落の中心地を西へ移動させていったものと考えられる。集落移動の背景には、遺跡が標高0.3～0.6m程度で、放生津潟縁辺部の低湿地に所在するという立地上的特性があったものと思われる。気候の温暖化に伴う海水面上昇等によって居住環境が悪化したため、高島A遺跡等、より標高の高い居住環境の良好な場所へと集落の中心地を移していったのであろう。

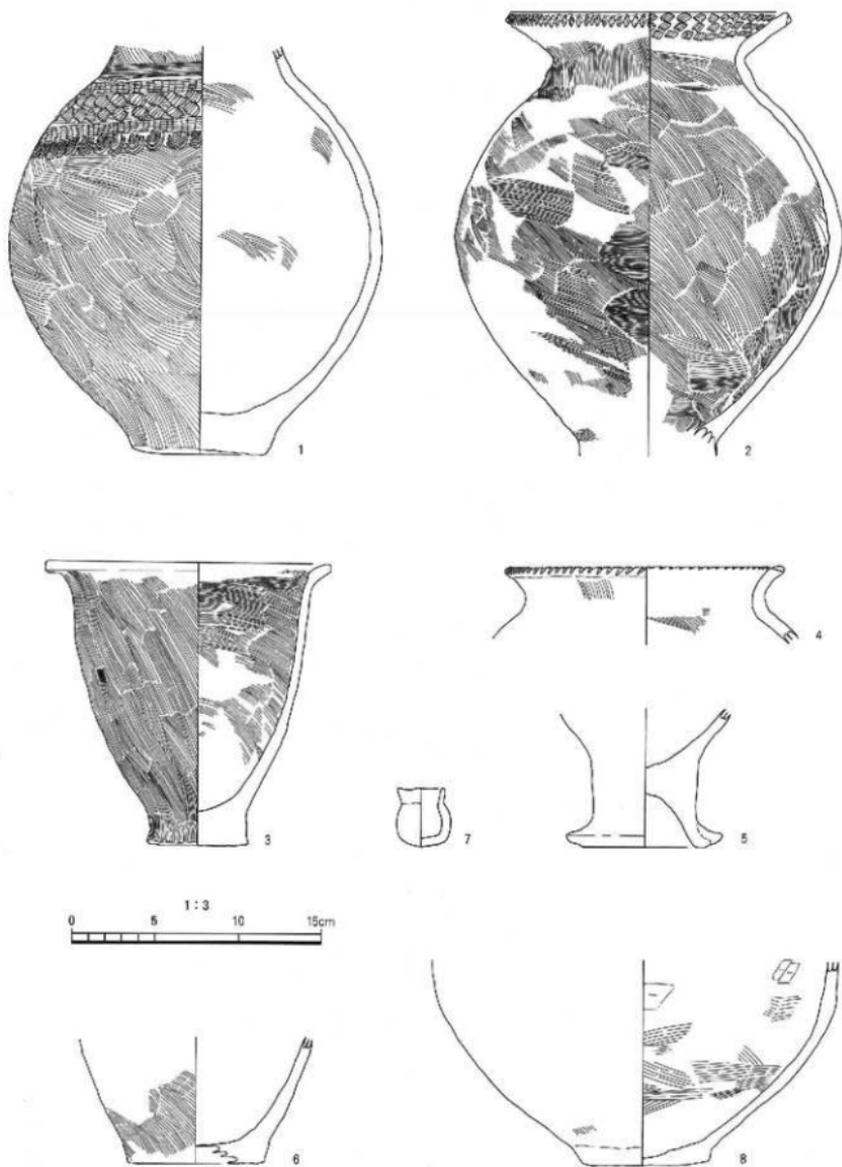
近年、市内での弥生時代中期の遺跡の調査例が増加しており、今回報告した作道遺跡や高島A遺跡、津幡江遺跡、小林遺跡、三ツ木開免遺跡、中曽根西遺跡など放生津潟縁辺部の様子が少しずつ明らかになってきている。射水平野は水稲耕作の適地であり、河川や潟湖、日本海を利用した水陸交通の要衝に位置するなど、恵まれた環境下にある。今回の調査では炭林式土器や中部高地からの搬入品とみられる磨製石斧が出土しているが、内陸部の小林遺跡や津幡江遺跡でも炭林式土器が出土している点から、個々の集落が潟や河川を介して結びつき、互いに密接な関係の下で集落を営んでいたものと考えられる。



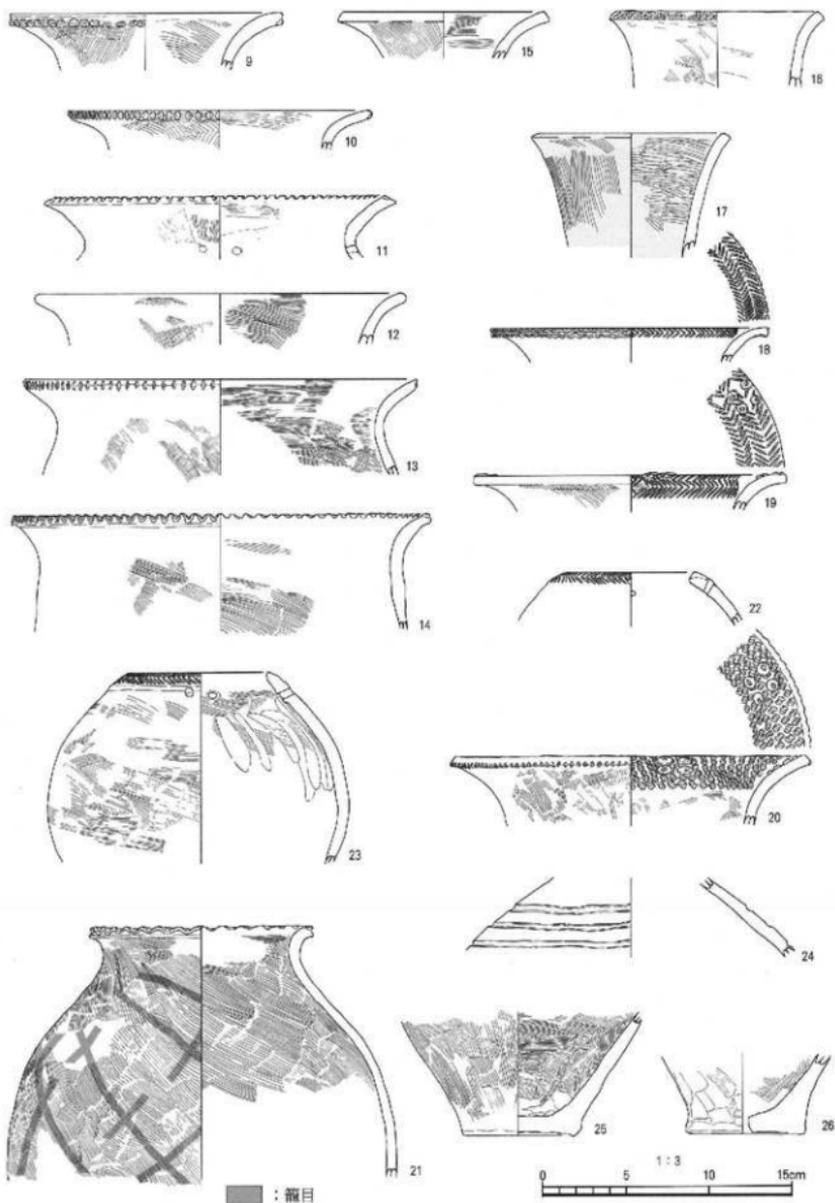
第21図 作道遺跡集落構成推定図 (1/5,000)

引用・参考文献

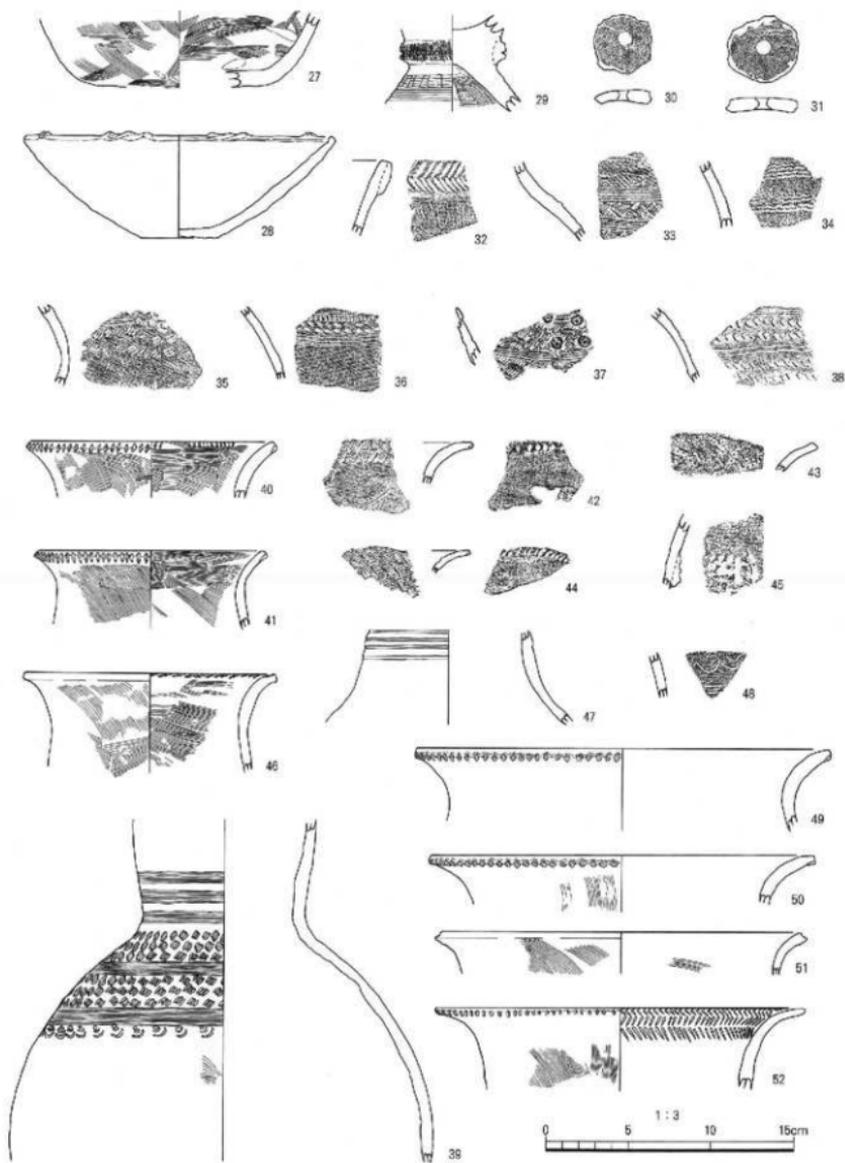
- 安藤広道 1999 「栗林式土器」の成立をめぐる諸問題『長野県考古学会誌92』長野県考古学会
- 石川県立埋蔵文化財センター 1988 『吉崎・次場遺跡』
- (財)石川県埋蔵文化財センター 2004 『猫橋遺跡』
- 上野 章 1972 「弥生時代附、古式土師器」『富山県史考古編』富山県
- 大島町教育委員会 2003 『小林遺跡』
- 大島町教育委員会 2005 「ニッ・木間遺跡発掘調査報告』
- 上市町教育委員会 1999 『放土ヶ瀬北遺跡発掘調査概要』
- 上市町教育委員会 1982 『北陸自動車道遺跡調査報告 上市町土器・石器編』
- 金沢市教育委員会 1988 『金沢市磯部運動公園遺跡』
- 国立歴史民俗博物館 2003 『歴史特別講演会 弥生時代の開始年代・AMS年代測定法の現状と可能性・』
- 国立歴史民俗博物館 2003 『特集』胎動する歴史学「実年代」弥生時代よどこへゆく! 『藤博 No.120』
- 小松市教育委員会 2003 『八日市地方遺跡Ⅰ』
- 清水町教育委員会 2002 『辰谷』
- 下村教育委員会 1999 『下村加茂遺跡』
- 上越市 2003 『上越市史 資料編 2 考古』
- 新湊市教育委員会 1998 『新湊市埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ』
- 新湊市教育委員会 2000 『高島A遺跡発掘調査概要』
- 新湊市教育委員会 2003 『市内遺跡試掘調査報告』
- 高岡市教育委員会 1995 『高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅵ』
- 高岡市教育委員会 1996 『石塚遺跡調査概報Ⅳ』
- 高岡市教育委員会 2001 『石塚遺跡・東木津遺跡調査報告』
- 高岡市教育委員会 2003 『石塚遺跡調査概報Ⅵ』
- 高岡市教育委員会 2004 『中曽根西遺跡調査報告』
- 立山町教育委員会 1987 『辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要』
- 下曲市教育委員会 2005 『尾代遺跡群 荒井遺跡5』
- 富山県教育委員会 1985 『小杉流通業務団地内遺跡群』
- 長野県考古学会弥生部会 1999 『長野県の弥生土器』
- 馬場伸一郎 2004 「弥生時代長野盆地における榎田型磨製石斧の生産と流通」『鞍台史学第120号』鞍台史学会
- 久田正弘 1991 「能登における弥生時代中期の様相(1)」『石川県考古学研究会々誌第34号』石川県考古学研究会
- 久田正弘 1999 「弥生時代中期の北陸と長野の関係」『長野県考古学会誌92』長野県考古学会
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1998 『東荒井遺跡』
- 福海貴子 2003 「第Ⅳ章第1節 八日市地方遺跡出土土器の検討」『八日市地方遺跡Ⅰ』小松市教育委員会
- 藤井昭二 1986 『埋没林と海水準変動』『季刊考古学 第15号』雄山閣
- 麻柄一志・真柄幸子 2005 「富山市小出遺跡出土の栗林式土器」『日本海文化研究所報34号』富山市日本海文化研究所
- 間坂義三郎 1966 「放生津潟南岸の牧野地区内古代遺跡」『放生津潟周辺の地学的研究第三集』富山地学会編
- 増山 仁 1989 「小松式土器の再検討」『北陸の考古学Ⅱ 石川県考古学研究会々誌第32号』石川県考古学研究会
- 安 英樹 2001 「北陸における弥生時代の拠点集落について」『石川県埋蔵文化財情報第6号』財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 古岡康暢 1991 「北陸弥生土器の編年と画期」『日本海地域の土器・陶磁「古代編」』



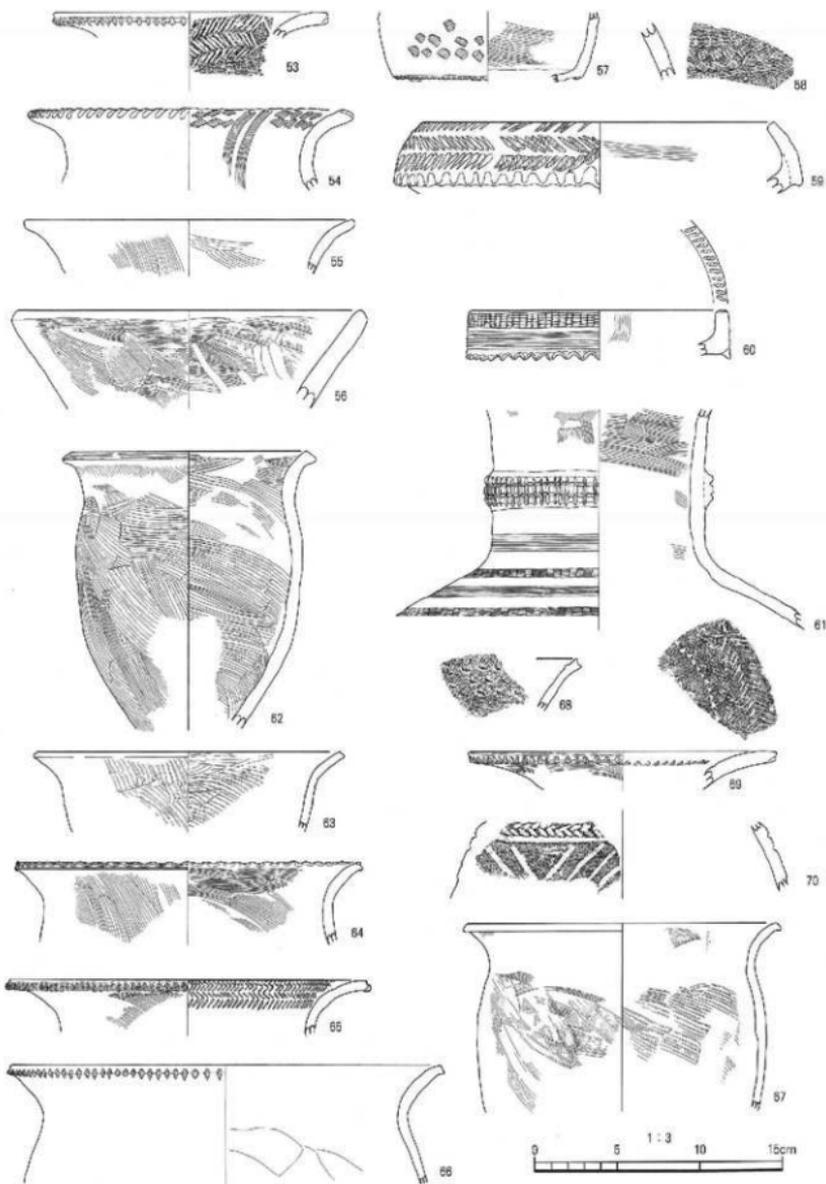
第22图 遗物实测图1 (1/3)
 [A地区] SX08(1~4) SD04(5) SD10(6) SK12(7·8)



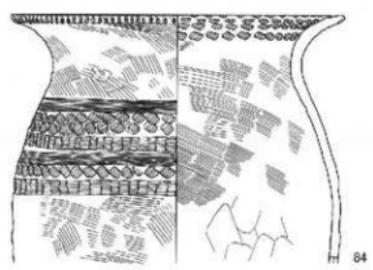
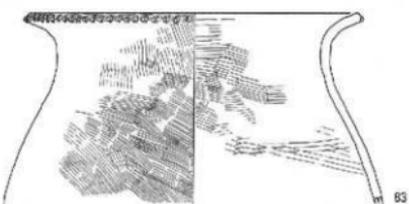
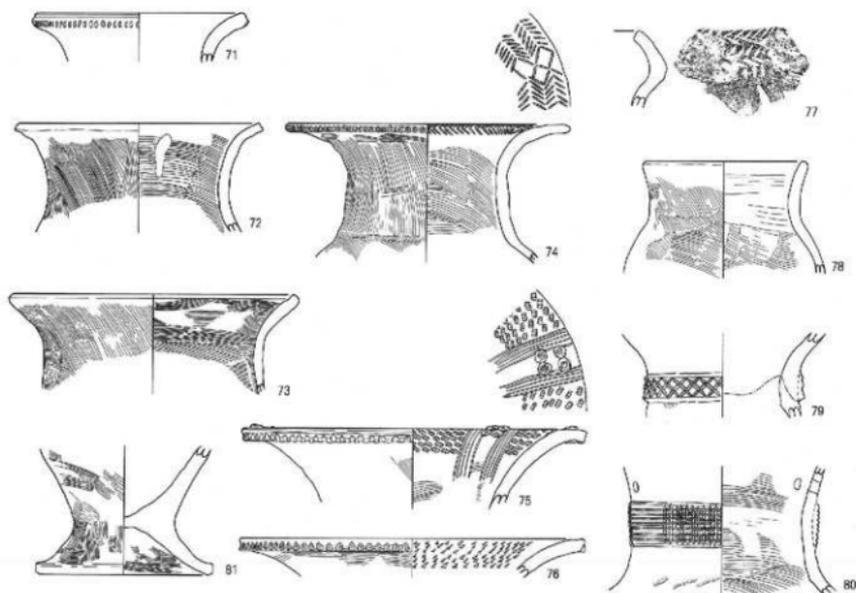
第23图 遗物实测图2 (1/3)
 (A地区) SR14(9~26)



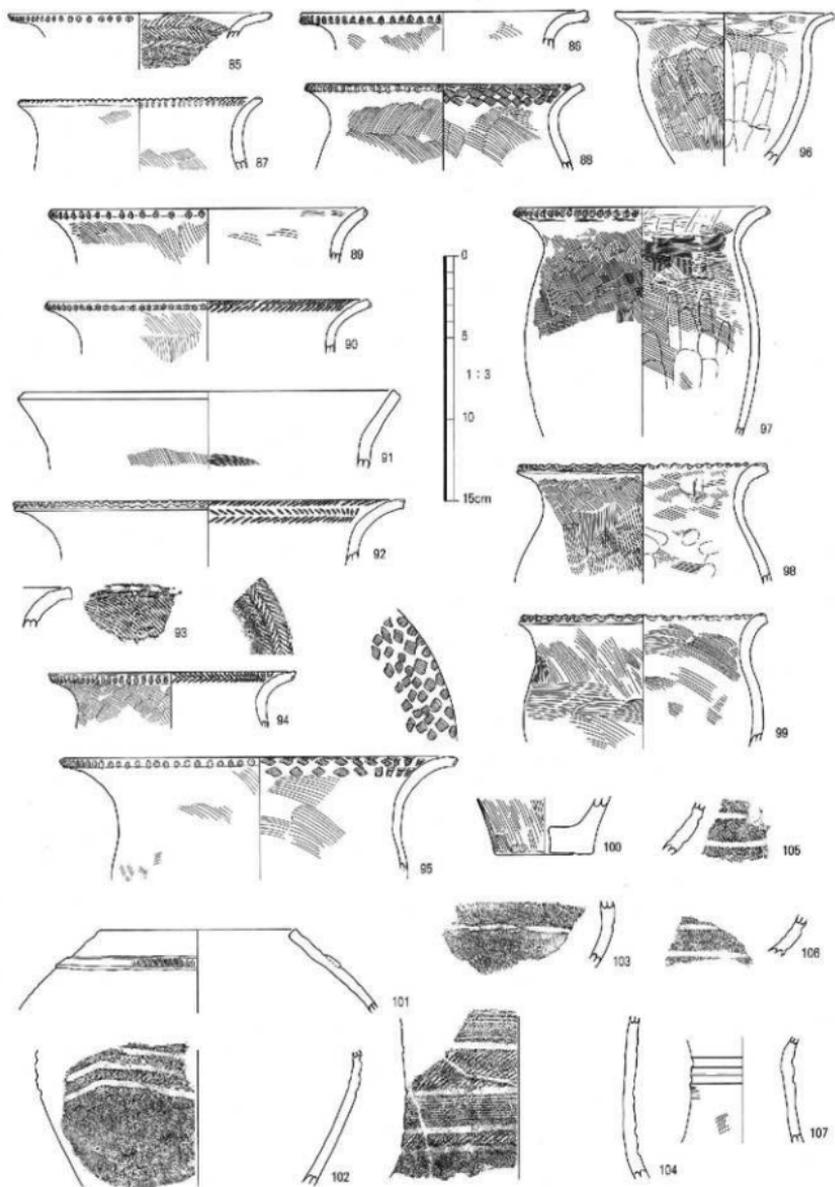
第24图 遺物実測図 3 (1/3)
 (A地区) S R14(27~38) (B地区) S D14(39) S K15(40~45) S K16(46~52)



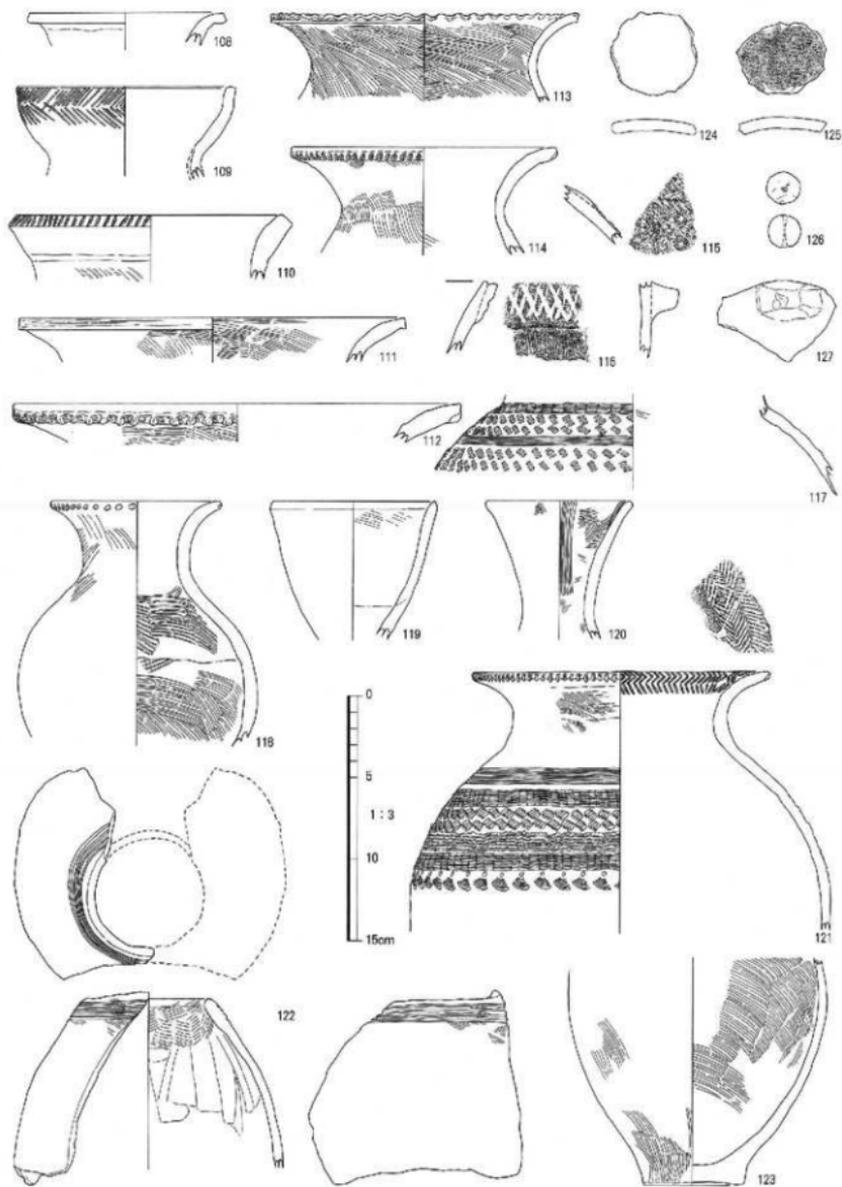
第25圖 遺物実測圖4 (1/3)
 [C地区] SK01(53~61) SD06(62~70)



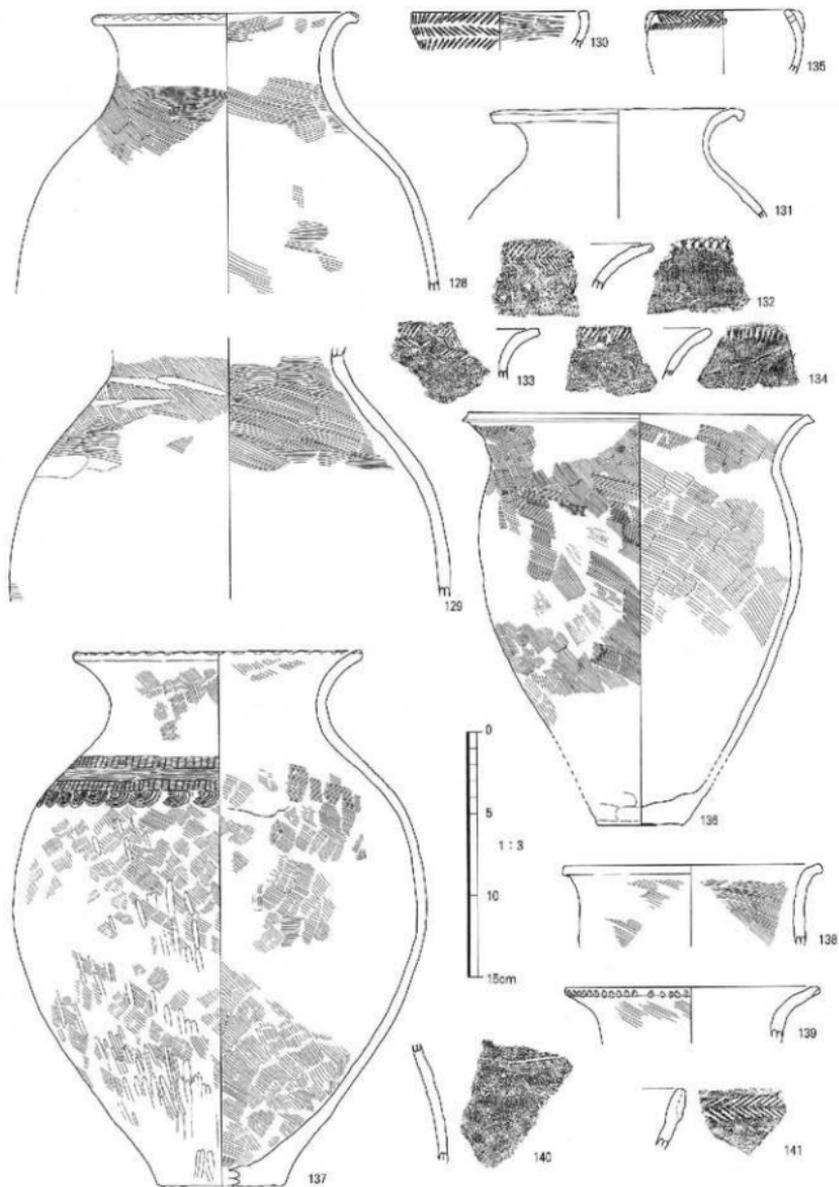
第26图 遗物实测图5 (1/3)
(C地区) S D06(71~82) S D07(83·84)



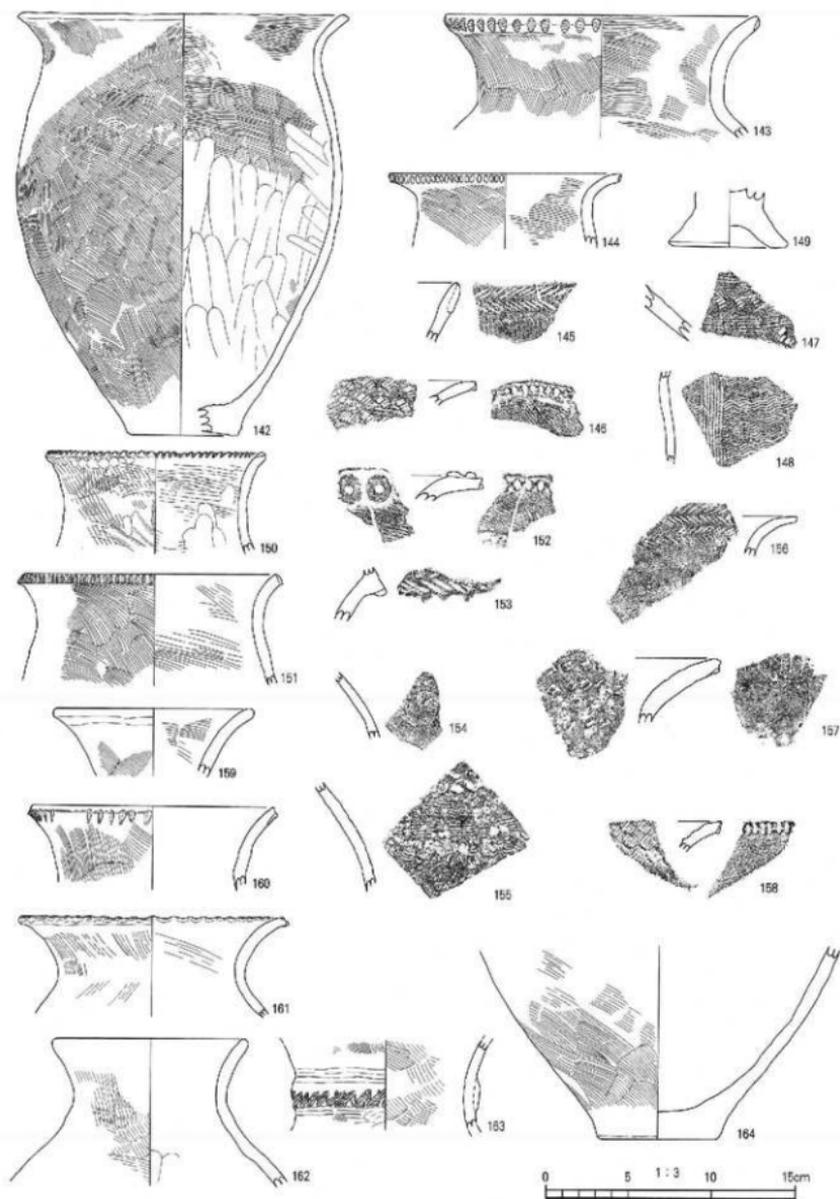
第27图 遗物实测图6 (1/3)
〔C地区〕 S D07(85~107)



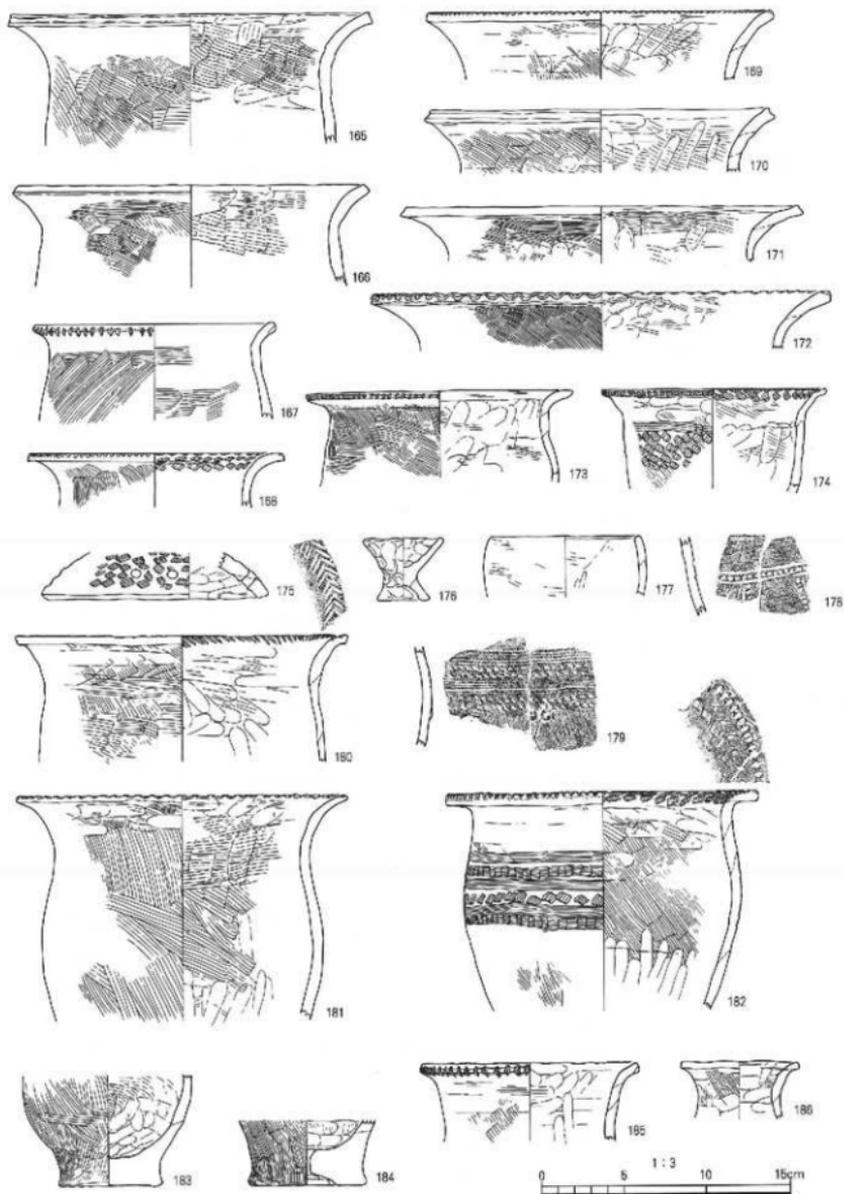
第28图 遺物実測図7 (1/3)
(C地区) S D07(108~127)



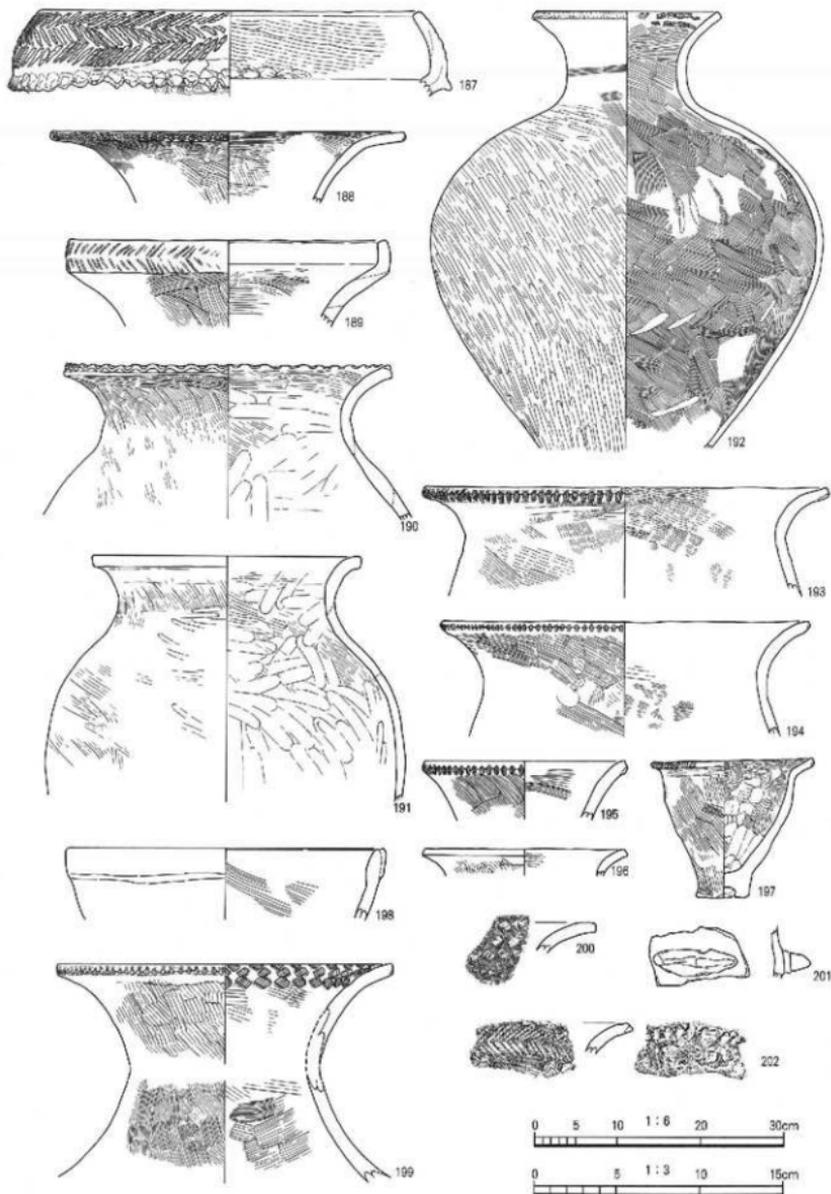
第29图 遗物实测图8 (1/3)
 (C地区) S D07(128·129) S K09(130~137) S K11(138~141)



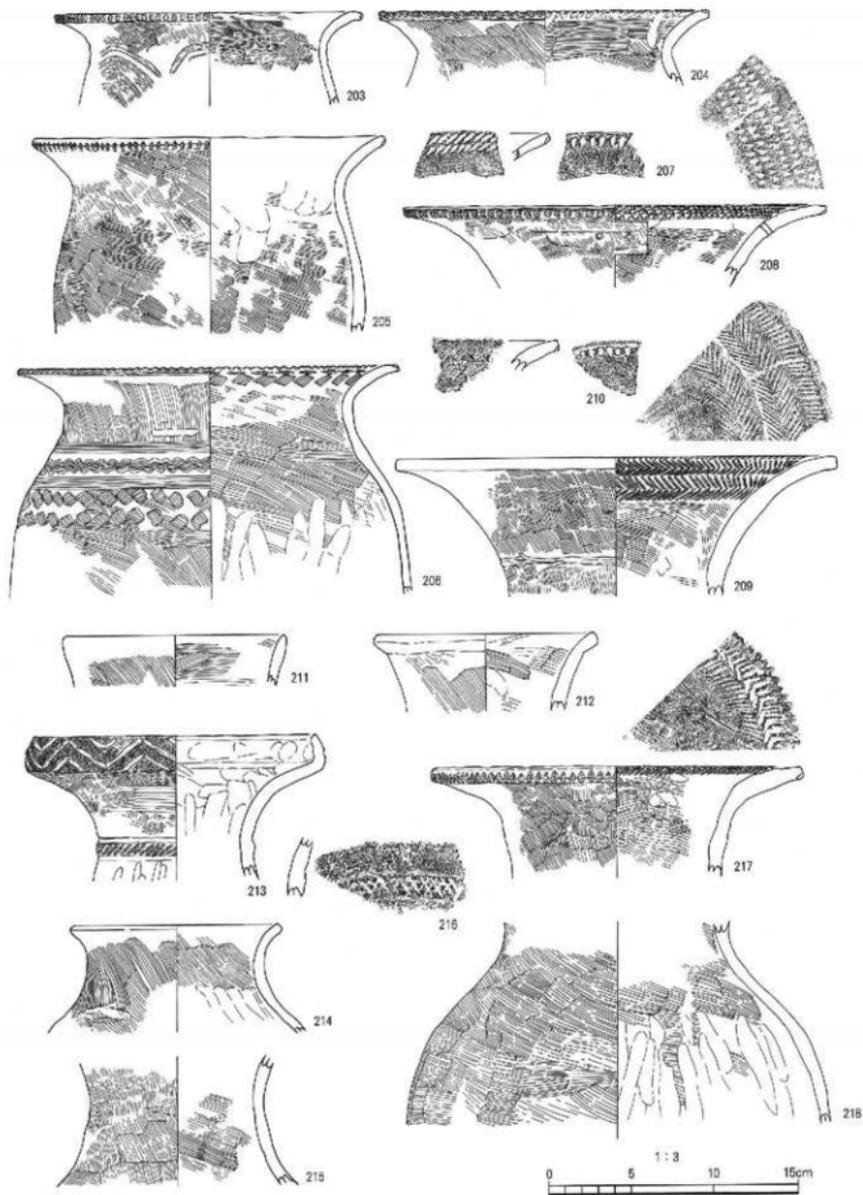
第30图 遺物実測図9 (1/3)
 (C地区) SK11(142) SD12(143~149) SK13(150~158) SD17(159~164)



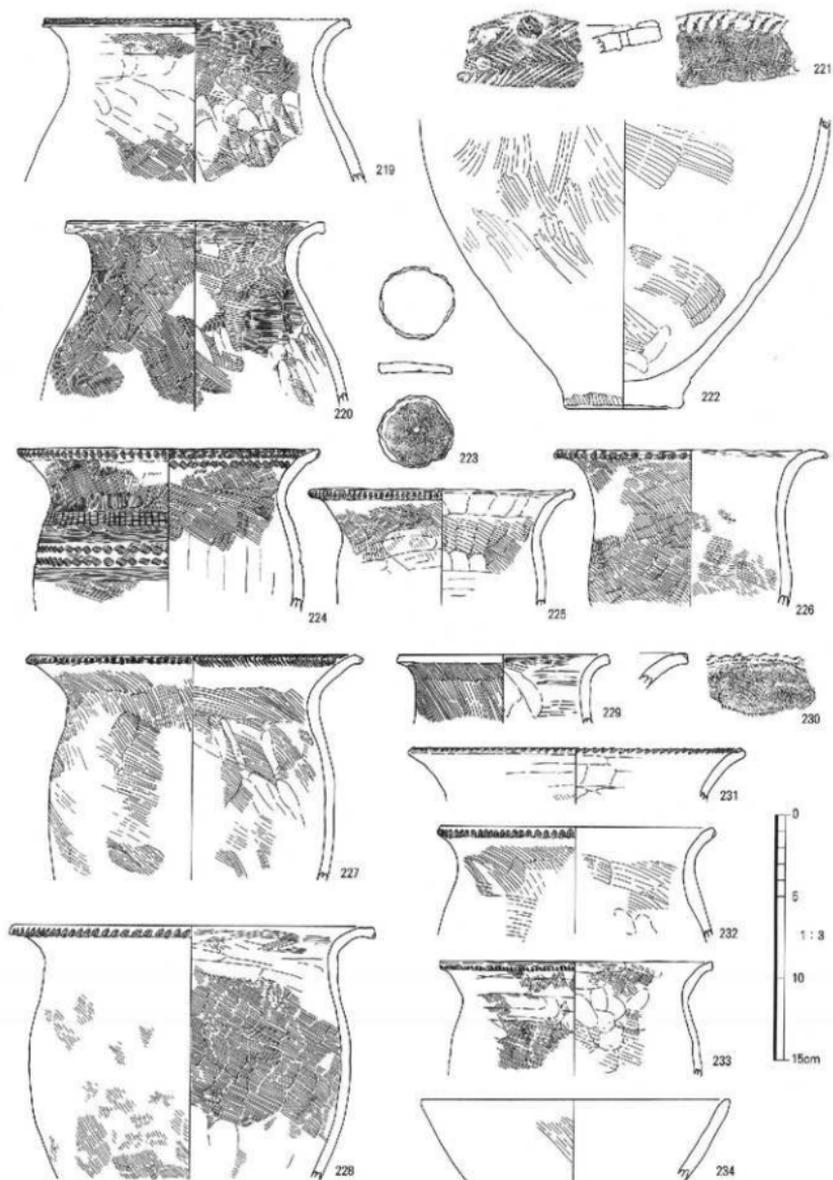
第31图 遗物实测图10 (1/3)
 [C地区] S D17(165~168) S R21(169~186)



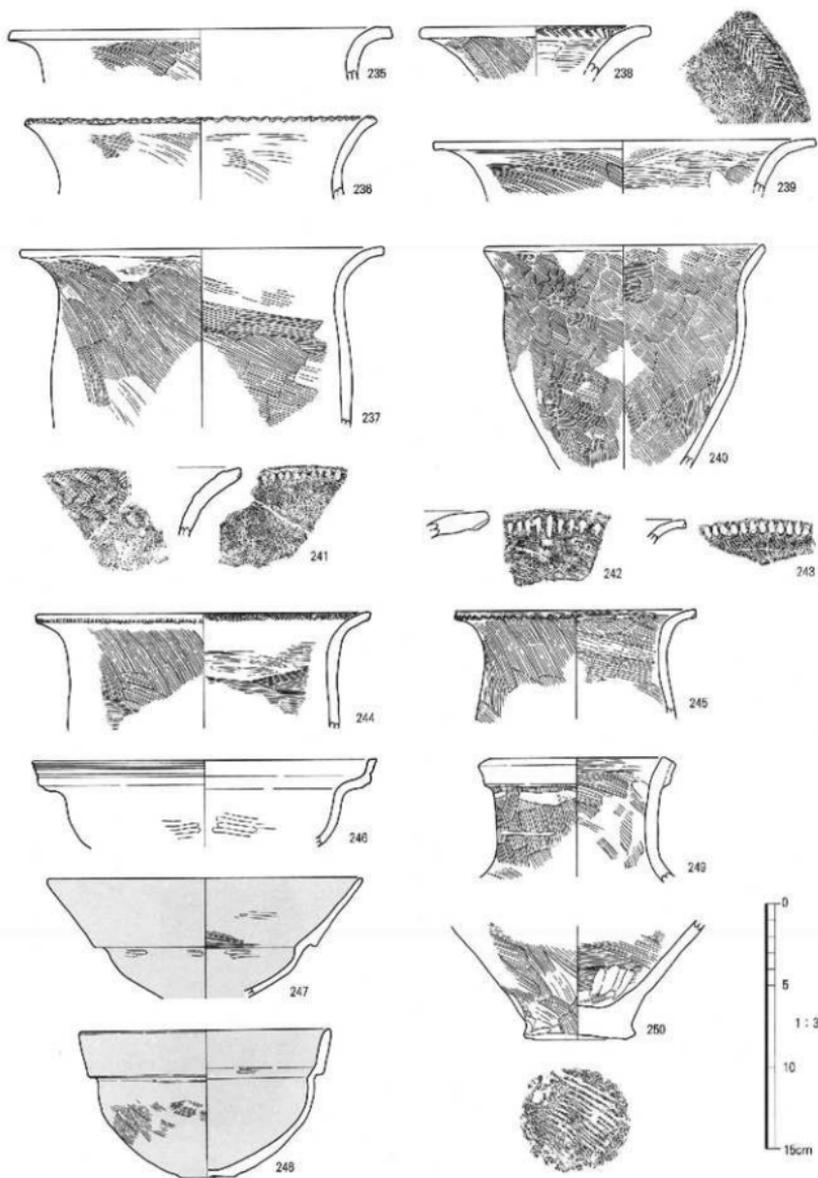
第32圖 遺物実測圖11 (187~191・193~202 : 1/3 192 : 1/6)
 [C地区] S R 21(187~192) S D 23(193~202)



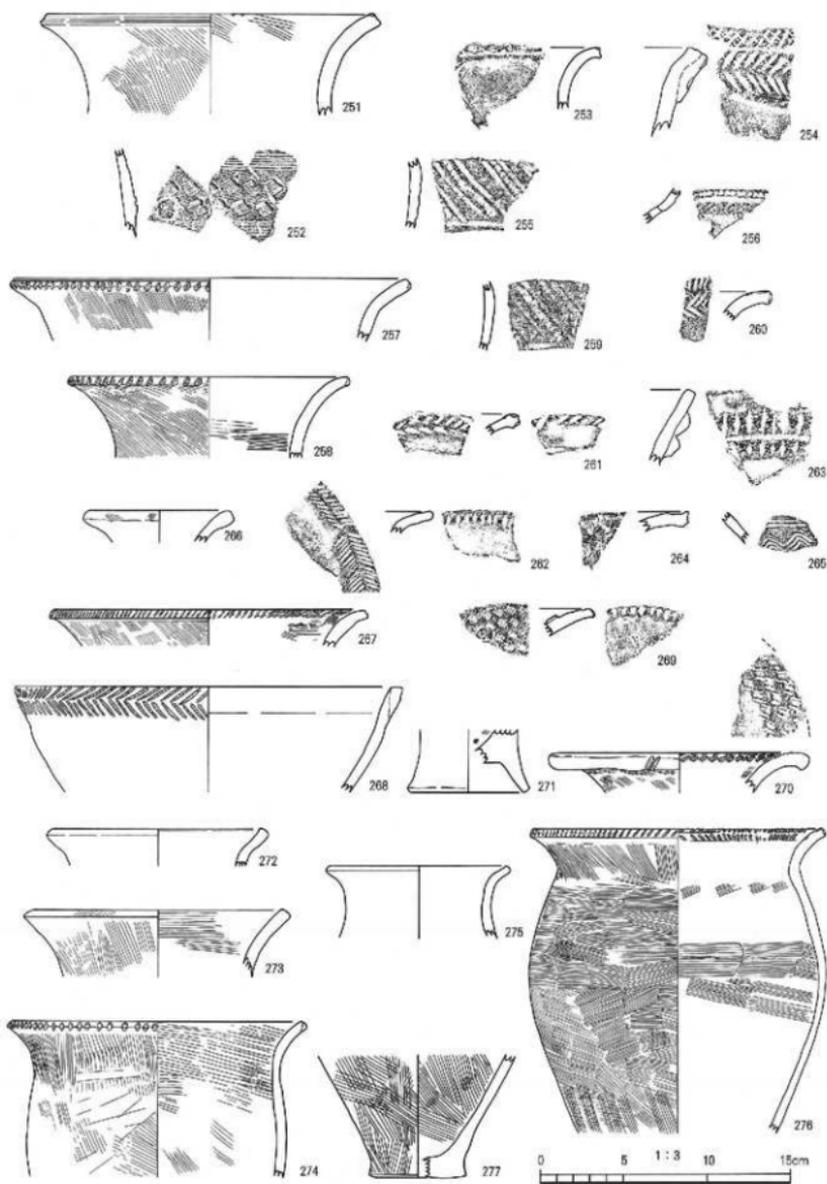
第33图 遗物实测图12 (1/3)
 (C地区) S K 24(203~209) S K 25(210) S D 27(211~218)



第34图 遺物実測図13 (1/3)
 (C地区) S D27(219~234)

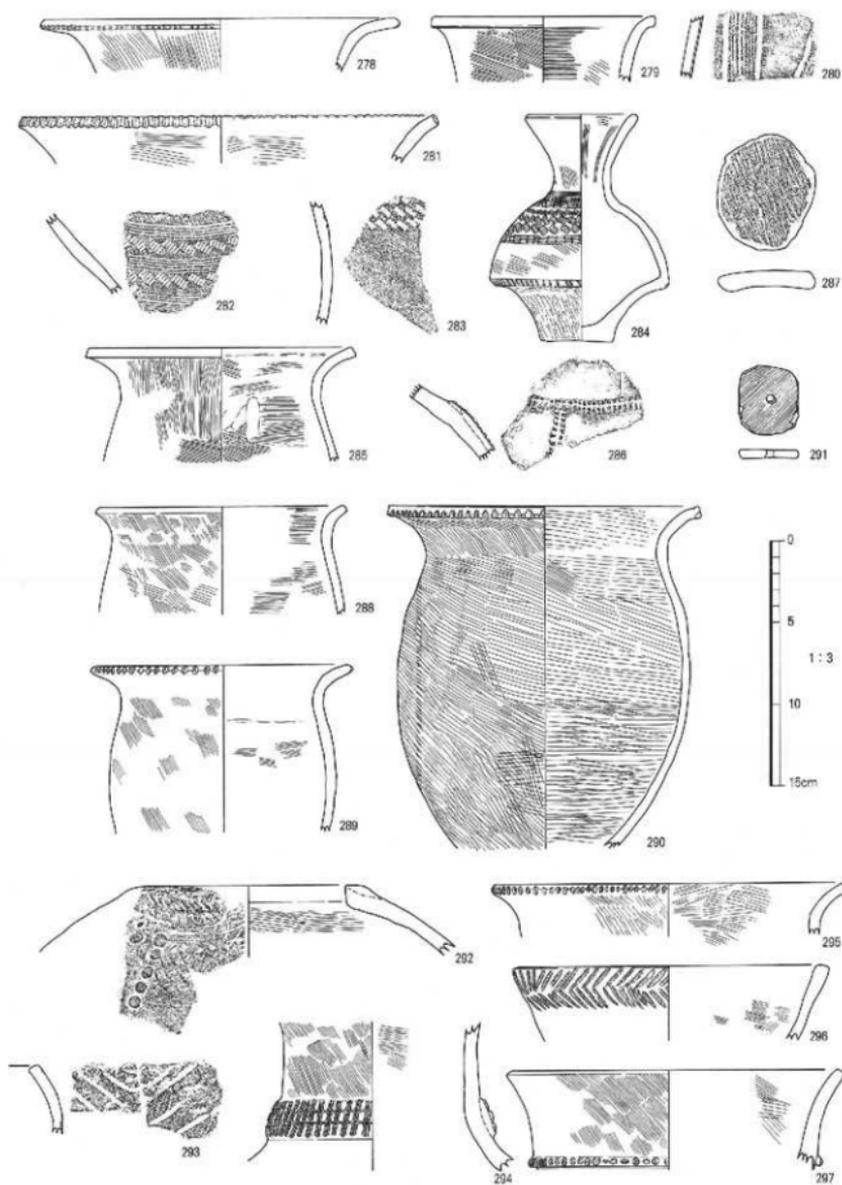


第35图 遺物実測図14 (1/3)
 [C地区] S D 28(235~243) S R 29 (244~250)

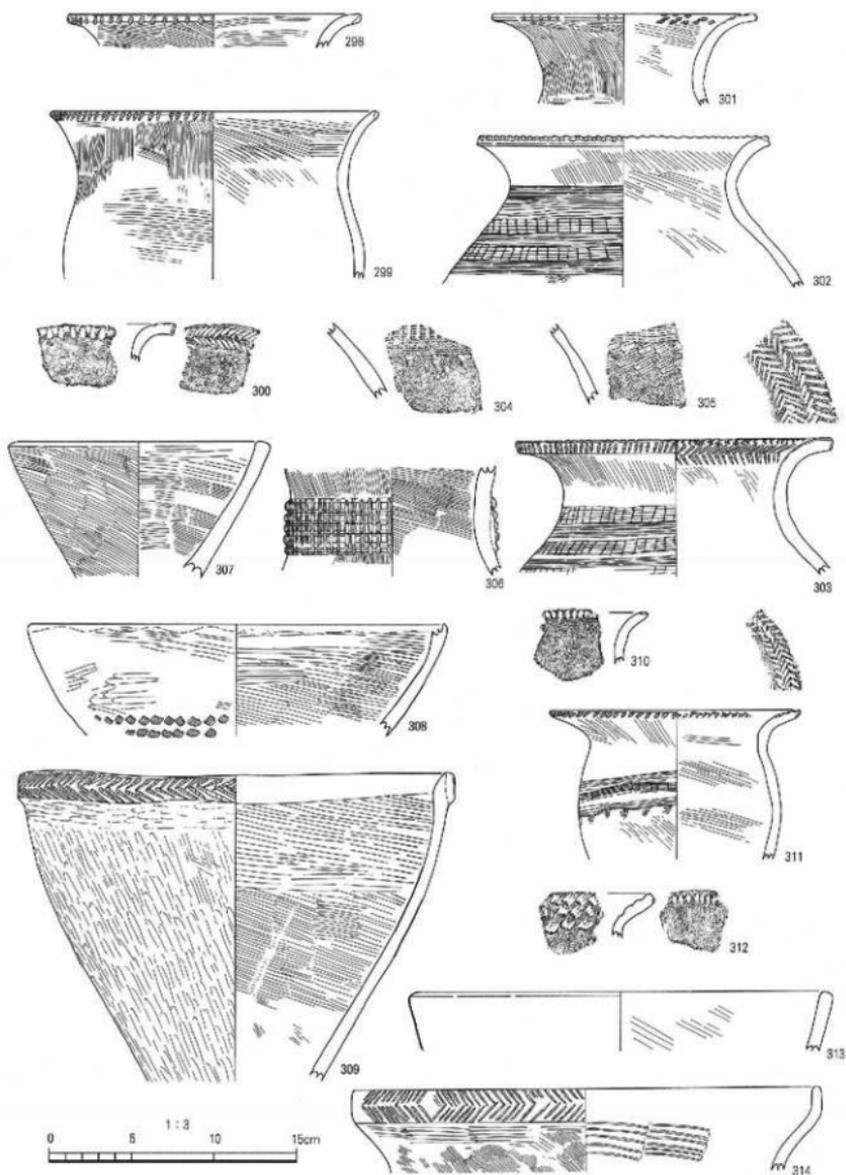


第36图 遗物实测图15 (1/3)

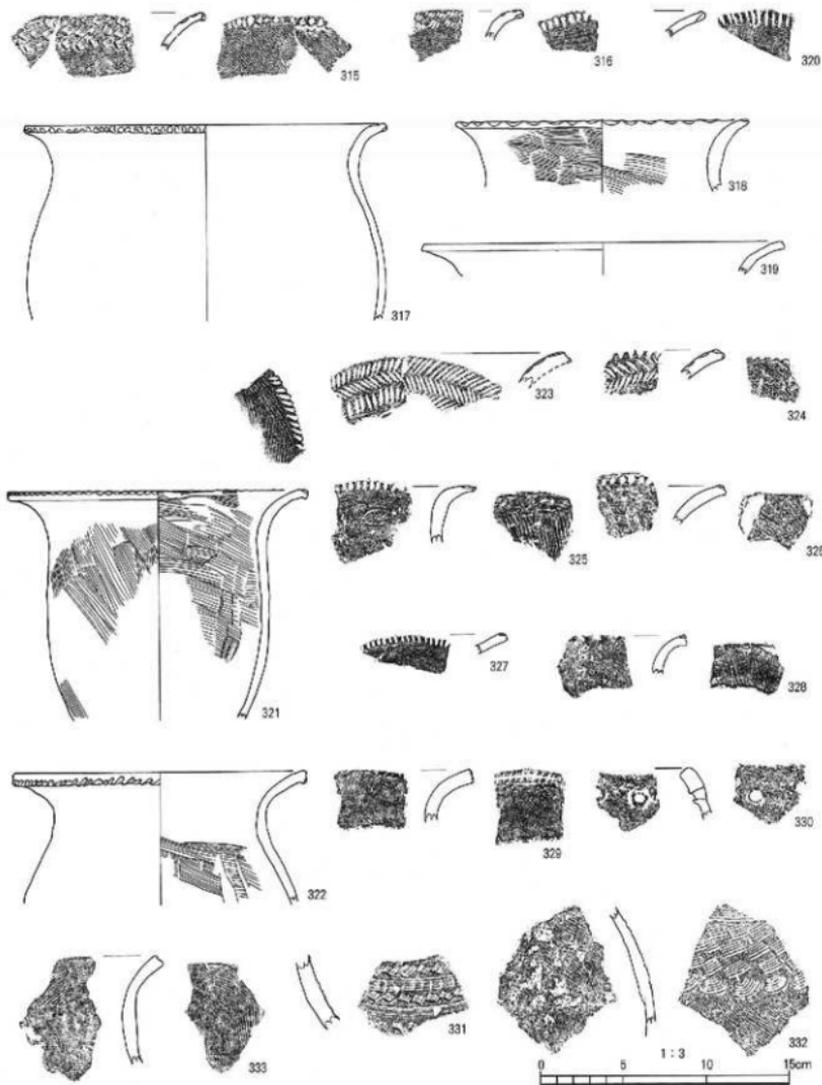
[D地区] SK01(251~256) SK02(257~259) SK03(260) SK09(261~265) SD13(266~271) SK14(272~277)



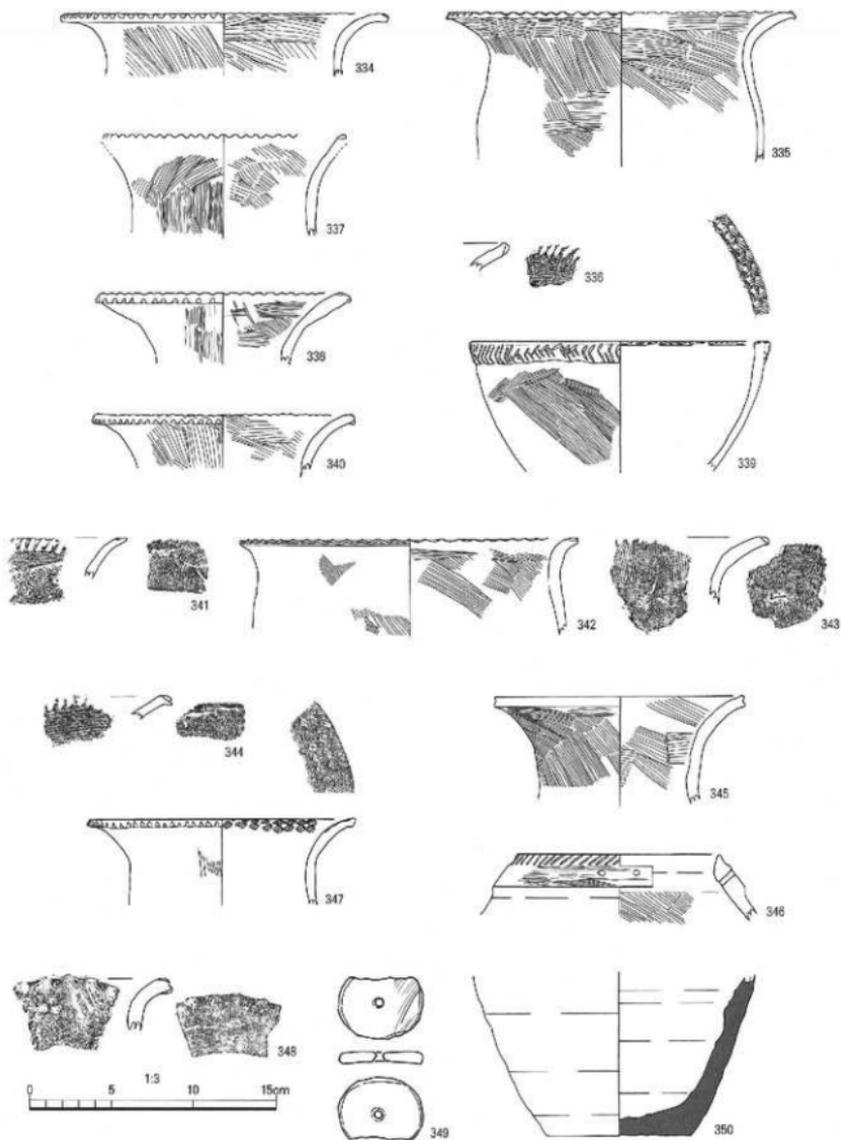
第37图 遺物実測図16 (1/3)
 (D地区) SK16(276~280) SK18(281) SD19(282~284) SD27(285~287) SD28(288~291) SX26(292~297)



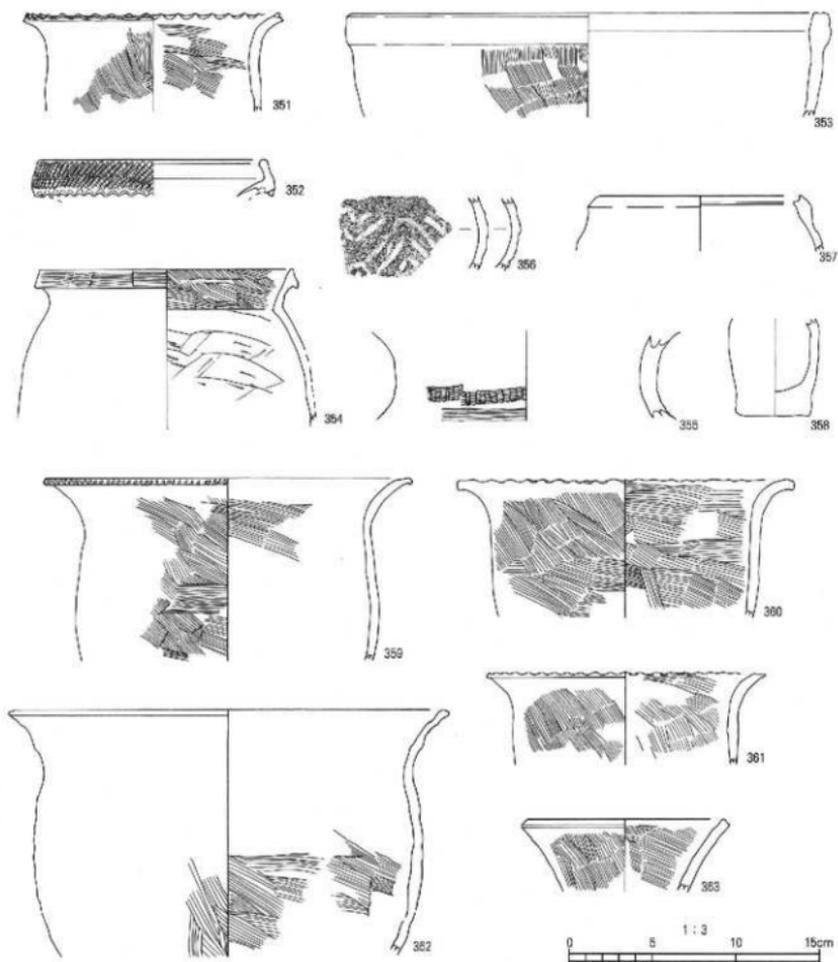
第38图 遗物实测图17 (1/3)
 (D地区) S R 23(298~306) S K 24(310) S D 25(311) S K 29(312~314)



第39图 遺物実測図18 (1/3)
 [E地区] SK01(315~319) SK02(320) SK04(321・322) SK10(323) SK11(324~326) SK12(327~332) SK34(333)

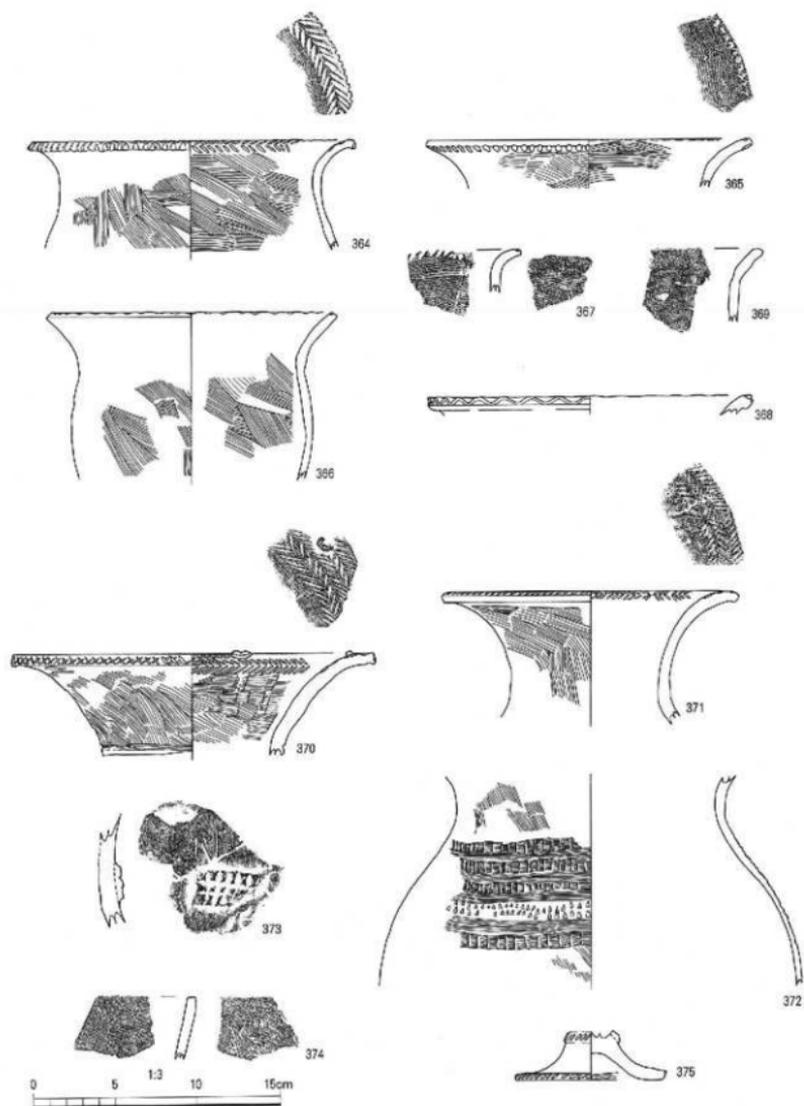


第40图 遺物実測図19 (1/3)
 (E地区) S K 32(334~339) S K 42(340) S K 43(341~343) S K 44(344~346) S P 23(347) S P 30(348) S P 15(349) S E 39(350)

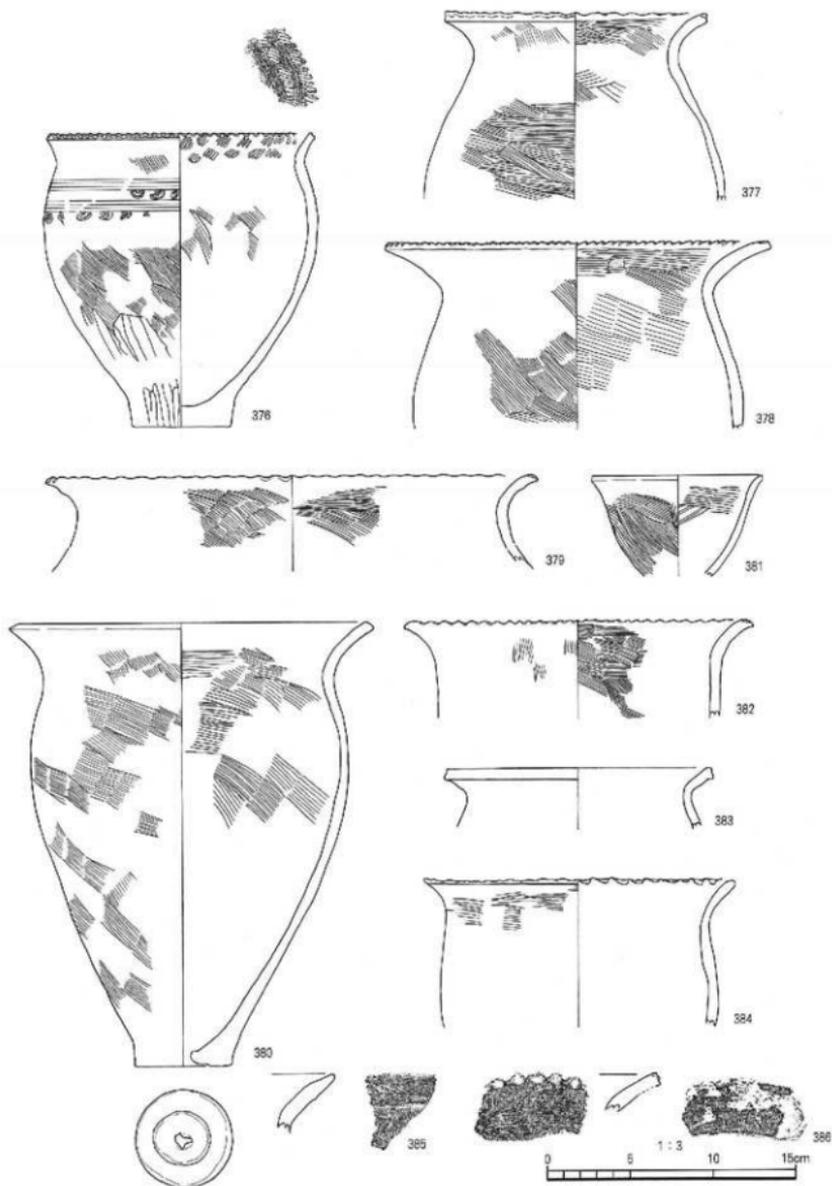


第41图 遗物実測図20 (1/3)

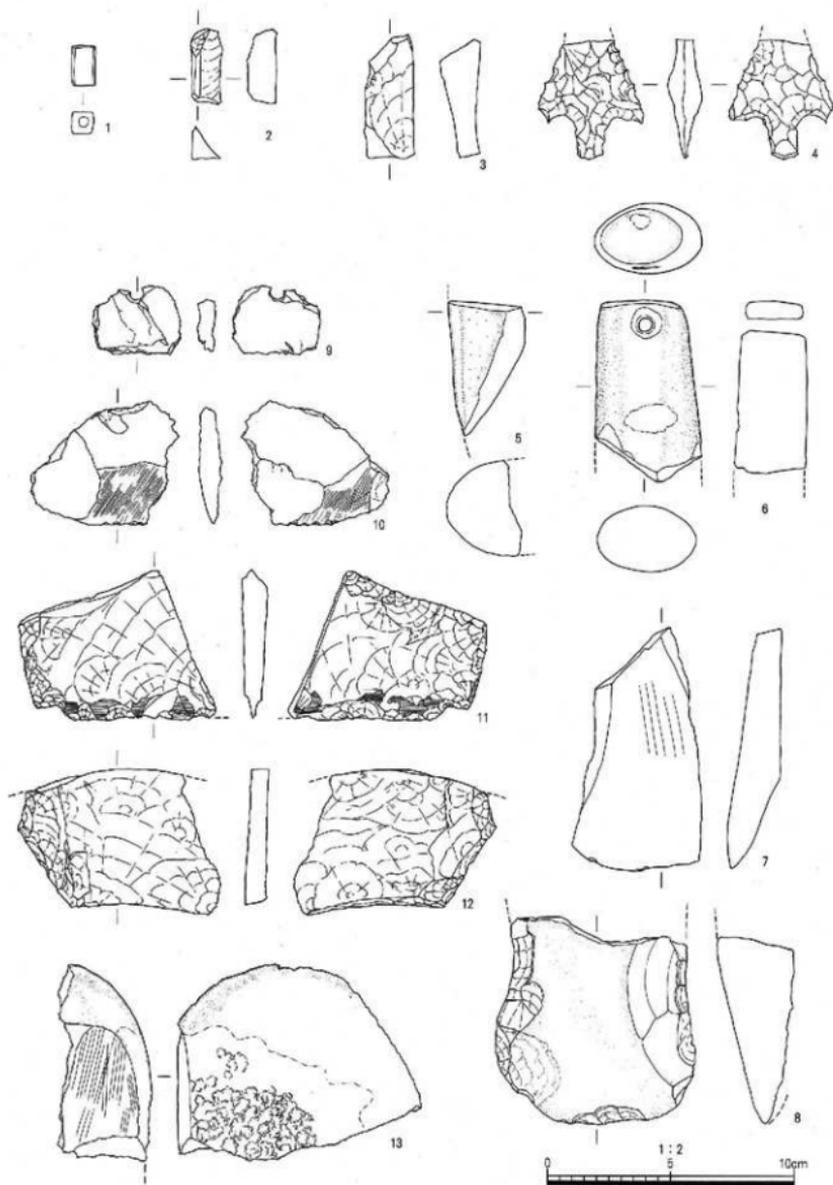
(E地区) S X09(351~353) S R14(354・356) S X38(359~363) [F地区] S R08(356・357) 包含層(358)



第42图 遺物実測図21 (1/3)
 [E地区] S D28(364~375)

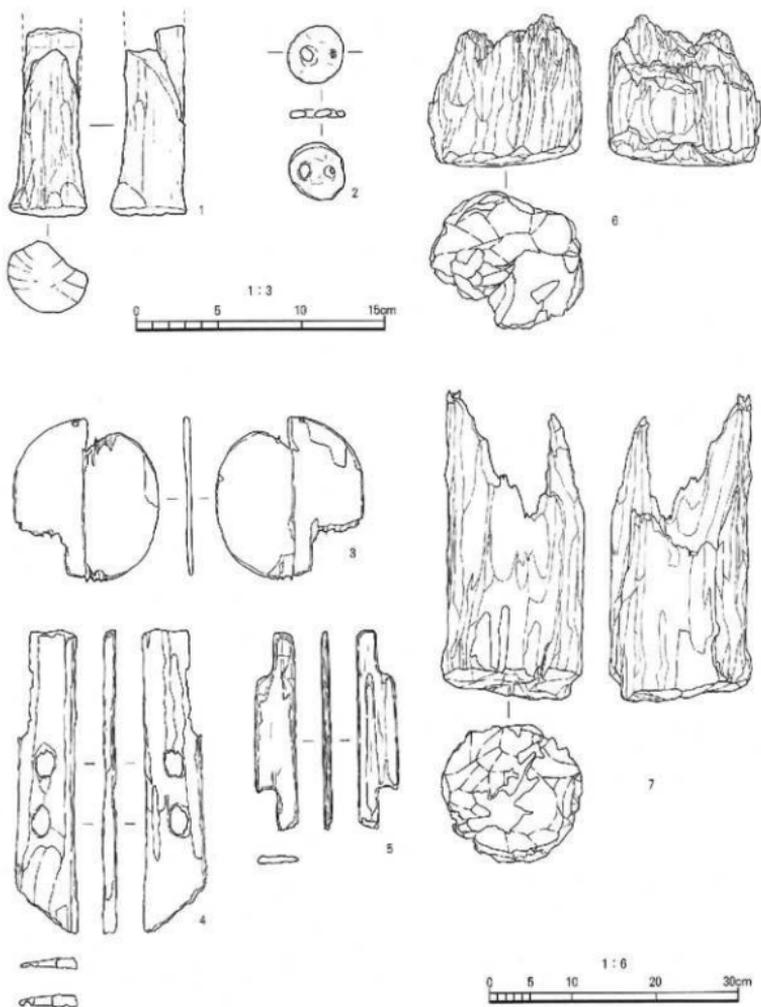


第43图 遗物実測図22 (1/3)
 [F地区] S K03(376~378) S K04(379~381) S K05(382~385) S K07(386)



第44图 遺物実測図23 (1~4:1/1 5~13:1/2)

(B地区) 包含層(8) (C地区) S D06(6) S D07(11・12) S K14(7) S R21(13) S K25(4) 包含層(2)
 (D地区) S R23(1) S X26(5) 包含層(3) (E地区) S K43(9) 包含層(10)



第45图 遗物实测图24 (1·2:1/3 3~7:1/6)
 [A地区] S R21(1) [C地区] S D07(2) [E地区] S E24(3) S E39(4·5) S P17(6) S P21(7)

第4表 遺構一覽表(1)

地区	遺構番号	遺構規模(m)		出土遺物	時期	備考
		長軸	短軸 最深度			
A	SX 03	3.92	1.86	弥生土器	弥生中期	理勢庭園関係の遺構か、SX 04を切る
A	SD 04		0.65	弥生土器	弥生中期	
A	SD 09		0.32	弥生土器	弥生中期	
A	SD 10		0.26	弥生土器	弥生中期	SD 11と同一遺構か
A	SD 11		0.40	弥生土器	弥生中期	SD 10と同一遺構か
A	SK 12	0.55	0.20	土師器	古墳前期	土器埋納遺構か
A	SK 13			弥生土器	弥生中期	
A	SR 14	26.00	0.72	彌生土器・弥生土器・ヒスイ原石・木製 土器(筒)	彌生晩期～弥生後期	Y18付近まで北半部にカクタン
B	SK 01	2.28	0.44+	弥生土器	弥生中期	SK 02を切る
B	SK 02	2.44	0.52+	なし	弥生中期?	SK 01に切られる
B	SK 03	2.60	1.82	なし	近現代?	
B	SD 04	4.64	0.24+	弥生土器・近現代陶磁器	近現代	旧用水路跡、昭和60年代初期までに埋め立て
B	SX 05	2.20	1.24	弥生土器	弥生?	
B	SP 06	0.48	0.42	なし	不明	
B	SD 07		0.86	なし	不明	
B	SK 08	0.61	0.50	弥生土器	弥生中期	
B	SK 09	1.24	0.24	弥生土器・木片	弥生中期	
B	SP 10	0.40	0.32	弥生土器・越中瀬戸	弥生中期?	越中瀬戸は藤作土からの混入か
B	SP 11	0.58	0.20+	弥生土器	弥生中期	SK 17に切られる
B	SK 12	0.58	0.40	弥生土器	弥生中期	SK 19を切る
B	SK 13	0.60	0.58	弥生土器	弥生中期	
B	SD 14		0.76	弥生土器・木片	弥生中期	
B	SK 15	1.90	1.00	弥生土器・木片	弥生中期	
B	SK 16	1.60	0.38	弥生土器・木片	弥生中期	土器多く出土
B	SK 17	0.65	0.40	なし	不明	SK 11を切る
B	SK 18	0.70	0.59	弥生土器	弥生中期	
B	SP 19	0.24	0.22	なし	弥生?	SK 12に切られる
C	SK 01	1.26	1.89	弥生土器・木製品(住居?)	弥生中期	土器多く出土
C	SD 02		0.42	弥生土器	弥生中期	SK 03・04を切る
C	SK 03		0.70+	弥生土器・木片	弥生中期	SD 02・SK 04に切られる
C	SK 04	1.08	0.90	弥生土器・木片	弥生中期	SK 03を切り、SD 02に切られる
C	SX 05	1.76	0.30+	弥生土器	弥生中期	SD 06・07と同時期に埋没か
C	SD 06	1.66	0.62	弥生土器・磨製石斧・緑糸凝灰岩・種子 (土器)	弥生中期	土器多く出土、SD 07との切り合い関係は不明瞭、D地区SD 13と同一遺構か
C	SD 07	0.92	0.35	弥生土器・土製円盤・土溝・打製石包 土・木製有孔円盤・木片	弥生中期	土器多く出土、SD 06との切り合い関係は不明瞭

第4表 遺構一覽表(2)

地区	遺構番号	遺構規模(m)		出土遺物	時期	備考
		長軸	短軸			
C	SK 08	2.90	1.40+	弥生土器・木片	弥生中期?	
C	SK 09	3.11	0.72	弥生土器・木片	弥生中期	南端部排水溝により再掘
C	SK 11	2.50+	3.94	弥生土器・近世磁器	近世以降	
C	SD 12	1.56	0.48	弥生土器・著状木製品	弥生中期	SK13とは切り合い関係なし、D地区SK16とは同一遺構か
C	SK 13	1.28	1.26	弥生土器・木片	弥生中期	SD12とは切り合い関係なし
C	SK 14	1.88	1.82	弥生土器・磨製石斧(原道具?)	近世以降	東圃SK15との境界不明瞭
C	SK 15	4.90	4.00	弥生土器・伊万里・緑色磁灰岩	近世以降	近世以降のカグランか
C	SK 16	1.80+	1.40	弥生土器・唐津?	近世以降	SK20に切られる
C	SD 17	2.08+	1.36+	弥生土器・安山岩割片・木片	近世以降?	幅は一定ではない、前半激しい
C	SK 20	6.00	0.25	弥生土器・磁石・ヒスイ原石・電子(毛)・木片	弥生中期	SK16・SD17を切る
C	SD 22	1.30	0.70	弥生土器	弥生中期	SK24と関係不明瞭、D地区SK25と同遺構か
C	SD 23	1.96	0.27	弥生土器・磁石・木片	弥生中期	SK25に切られる。前半激しい
C	SK 24	2.20	0.29	弥生土器・木製品(柱根?)	弥生中期	SK24との切り合い関係は不明瞭
C	SK 25	2.10	2.02+	弥生土器・石鏝・木片	弥生中期	SD20に切られる、SD22との切り合い関係は不明瞭
C	SD 26	1.18	0.24	木片	弥生中期	SD23を切る、前半激しい
C	SD 27	0.86	0.12	弥生土器・木片	弥生中期	土器多く出土
C	SD 28	1.10	0.82	弥生土器・木片	弥生中期	北側に向かって段階的に深くなる
C	SR 29	22.00	1.06+	弥生土器・緑色凝灰岩・鉄石英	弥生中～後期	トレンチ調査により充分せず、D地区SK23と同遺構か
D	SK 01	2.68	0.30+	弥生土器・木片	弥生中期	SK03を切る
D	SK 02	1.28	0.94	弥生土器・板状木製品?	弥生中期	SK02に切られる
D	SK 03	1.30+	1.38	弥生土器・木片	弥生中期	SK05に切られる
D	SK 04	2.30	0.24+	弥生土器・緑色凝灰岩	弥生中期	遺物はSK05出土の可能性有り
D	SK 05	2.70	0.58	弥生土器・緑色凝灰岩	弥生中期	SK04を切る、遺物はSK04出土の可能性有り
D	SP 07	0.36	0.30	弥生土器	弥生中期	
D	SP 07	0.40	0.38	弥生土器	弥生中期	
D	SP 08	0.80	0.24+	弥生土器	弥生中期?	
D	SK 09	0.50+	0.64	弥生土器・炭化米・板状木製品?	弥生中期?	
D	SK 10	0.80	0.70	弥生土器・木片	不明	井戸か
D	SK 11	0.36	0.50	なし	不明	不整形の土坑
D	SK 12	1.80+	1.20	弥生土器・木片	弥生中期?	SK21に切られる
D	SD 13	5.20	0.35	弥生土器	弥生中期	SK14に切られる、C地区SD06と同一遺構か
D	SK 14	1.46	0.98	弥生土器・ヒスイ原石・板状木製品?	弥生中期	土器多く出土、SD13を切る
D	SK 15	1.74+	2.10	弥生土器・緑色凝灰岩	弥生中期?	
D	SK 16	2.40+	1.74	弥生土器	弥生中期?	C地区SD12と同一遺構か
D	SD 17	0.64	0.12	弥生土器	弥生中期?	SK18を切る
D	SK 18	2.50	1.40	弥生土器・青磁	弥生中期?	SD17に切られる

第4表 遺構一覽表(3)

地区	遺構番号	遺構規模(m)		出土遺物	時期	備考
		長軸	短軸			
D	SD 19		1.20	弥生土器・木片	弥生中期	SD 27と一連の遺構か
D	SK 20	2.40	1.20+	白磁?	中世?	SK 21を切る
D	SK 21	1.60+	2.40	なし	不明	SK 30に切られる
D	SP 22	0.22	0.20	弥生土器	弥生中期	
D	SR 23	11.60	0.71	弥生土器・菅玉未風鳥	弥生中期	C地区SR 21・SR 29と同一遺構か
D	SK 24	2.20+	2.18	弥生土器・鉄石瓦	弥生中期	SK 29を切る
D	SD 25	0.95	0.23	弥生土器	弥生中期	SK 29を切る
D	SX 26	2.30	1.70+	弥生土器・楕圓石斧・近世不明陶器・木片	近世以降	近世以降のカクランか
D	SD 27	0.90	0.37	弥生土器・木片	弥生中期	SD 19と一連の遺構か
D	SD 28		0.68	弥生土器・木片	弥生中期	
D	SK 29	0.90+	0.84+	弥生土器	弥生中期	SK 24・SD 25に切られる、弥生土器はSK 24出土の可能性有
E	SK 01	2.65+	0.78+	弥生土器	弥生中期	SK 02に切られる
E	SK 02	3.90+	0.32+	弥生土器	弥生中期	SK 01を切る、礎状遺構か
E	SX 03	28.00	6.00	弥生土器	弥生中期	C地区SR 29の東端部か
E	SK 04	0.84	0.65	弥生土器	弥生中期	
E	SP 05	0.40	0.37	弥生土器	弥生中期	
E	SP 06	0.35	0.30	弥生土器	弥生中期	
E	SP 07	0.48	0.35	弥生土器	弥生中期	
E	SP 08	0.66	0.40	弥生土器	弥生中期	
E	SP 09	0.32	0.25+	なし	不明	
E	SK 10	1.09+	0.48	弥生土器	弥生中期	
E	SK 11	1.15+	0.55+	弥生土器	弥生中期	
E	SK 12	1.45+	0.95	弥生土器	弥生中期	SK 12に切られる
E	SP 13	0.47	0.28	弥生土器	弥生中期	SK 11を切る
E	SR 14	19.00	1.68	弥生土器・土師器・不明陶磁器	～古墳前期	F地区SR 08と同一遺構
E	SP 15	0.45	0.40	弥生土器・土製刀鏝	弥生中期	
E	SD 16	1.80	0.41	弥生土器	弥生中期	
E	SP 17	0.2+	0.37	緑色凝灰岩・柱根	弥生中期	
E	SP 18	0.42	0.40	弥生土器・緑色凝灰岩	弥生前期?	柱根よりC14放射性炭素
E	SP 19	0.35	0.28	なし	不明	
E	SP 20	0.35	0.45+	弥生土器・柱根?	不明	
E	SP 21	0.60	0.55	柱根	弥生中期	SP 22・SP 23に切られる、柱根よりC14放射性炭素
E	SP 22	0.30	0.27	なし	不明	SP 21を切る
E	SP 23	0.70+	0.57	弥生土器・緑色凝灰岩	弥生中期	SP 21を切る
E	SE 24	1.18	0.88+	弥生土器・中世土師器皿	中世	
E	SP 25	0.40+	0.45	弥生土器	弥生中期	
E	SP 26	0.30	0.18	なし	不明	

第4表 遺構一覽表(4)

地区	遺構番号	遺構規模(m)			出土遺物	時期	備考
		長軸	短軸	最深度			
E	SP 27	0.24	0.15+	0.18	なし	不明	
E	SD 28	2.90	0.22	0.22	弥生土器	弥生中期	土器付着炭化物よりC14飲料採取
E	SP 29	0.47+	0.53	0.08	なし	不明	
E	SP 30	0.50+	0.42+	0.10	弥生土器	弥生中期	
E	SP 31	0.37	0.35	0.16	なし	不明	
E	SK 32	0.94	0.80	0.35	弥生土器	弥生中期	土器付着炭化物よりC14飲料採取
E	SP 33	0.35+	0.42	0.07	なし	不明	SK34に切られる
E	SK 34	1.12	0.95	0.22	弥生土器	弥生中期	SK34に切られる
E	SP 35	0.50	0.42	0.10	弥生土器	弥生中期	SK33を切る
E	SP 36	0.50+	0.47	0.03	なし	不明	
F	SK 37	1.30	0.64+	0.30	弥生土器	弥生中期	
E	SK 38	16.00	14.50	0.15	弥生土器・珠洲焼	不明	
E	SE 39	0.60	0.57	0.54	珠洲焼・不明部材	中世	
E	SK 40	1.25	0.45	0.47	不明部材	不明	
E	SP 41	0.53	0.42	0.43	なし	不明	階層部排水溝により消滅
F	SK 42	0.98	0.37+	0.30	弥生土器	弥生中期	
E	SK 43	0.90+	0.83	0.05	弥生土器・石包丁	弥生中期	階層部排水溝により消滅
E	SK 44	1.02+	1.39	0.10	弥生土器・緑色燧灰岩	弥生中期	階層部排水溝により消滅
E	SD 45	1.85	1.59	0.10	中世土器器皿	中世?	D地区SD45と同一遺構か
F	SK 01	1.50+	0.70	0.44	なし	不明	
F	SK 02	2.20+	0.59	0.11	なし	不明	
F	SK 03	1.85	1.50	0.10	弥生土器	弥生中期	
F	SK 04	1.95	1.40	0.20	弥生土器	弥生中期	
F	SK 05	2.05	1.75+	0.30	弥生土器・越中瀬戸・ガラス片	近世以降	近世以降のカクランか
F	SK 06				なし	不明	
F	SK 07	3.00	2.25	0.25	弥生土器・越中瀬戸・染付	近世以降	近世以降のカクランか
F	SR 08	14.00	1.30	0.35	弥生土器・不明部材	近世以降	E地区SR18と同一遺構
F	SD 09	17.50	16.00	1.60	弥生土器・不明部材	中世?	E地区SD15と同一遺構か

第5表 土器・土製品観察表(6)

調査番号	調査地	出土層	種別	品名	位置	高さ	口径	底径	容量	用途	内径	外径	重量	土質	内径	外径	重量	備考
258	D	S 5.01	陶器土器	甕	15.4													内径不明
259	D	S 5.02	陶器土器	甕														内径不明
260	D	S 5.03	陶器土器	甕														内径不明
261	D	S 5.03	陶器土器	甕														内径不明
262	D	S 5.03	陶器土器	甕														内径不明
263	D	S 5.03	陶器土器	甕														内径不明
264	D	S 5.03	陶器土器	甕														内径不明
265	D	S 5.03	陶器土器	甕														内径不明
266	D	S 5.03	陶器土器	甕														内径不明
267	D	S 5.03	陶器土器	甕														内径不明
268	D	S 5.03	陶器土器	甕														内径不明
269	D	S 5.03	陶器土器	甕														内径不明
270	D	S 5.03	陶器土器	甕														内径不明
271	D	S 5.03	陶器土器	甕														内径不明
272	D	S 5.14	陶器土器	甕	12.4													内径不明
273	D	S 5.14	陶器土器	甕	14.9													内径不明
274	D	S 5.14	陶器土器	甕	15.4													内径不明
275	D	S 5.14	陶器土器	甕	16.4													内径不明
276	D	S 5.14	陶器土器	甕	7.2													内径不明
277	D	S 5.14	陶器土器	甕	8.8													内径不明
278	D	S 5.14	陶器土器	甕	21.0													内径不明
279	D	S 5.14	陶器土器	甕	15.2													内径不明
280	D	S 5.14	陶器土器	甕	24.3													内径不明
281	D	S 5.14	陶器土器	甕	24.3													内径不明
282	D	S 5.14	陶器土器	甕	25.2													内径不明
283	D	S 5.14	陶器土器	甕	25.0													内径不明
284	D	S 5.14	陶器土器	甕	6.3													内径不明
285	D	S 5.14	陶器土器	甕	15.7													内径不明
286	D	S 5.14	陶器土器	甕	7.0													内径不明
287	D	S 5.14	陶器土器	甕	14.4													内径不明
288	D	S 5.14	陶器土器	甕	15.0													内径不明
289	D	S 5.28	陶器土器	甕	15.0													内径不明
290	D	S 5.28	陶器土器	甕	15.4													内径不明
291	D	S 5.28	陶器土器	甕	4.2													内径不明
292	D	S 5.28	陶器土器	甕	12.0													内径不明
293	D	S 5.28	陶器土器	甕	17.0													内径不明
294	D	S 5.28	陶器土器	甕	11.0													内径不明
295	D	S 5.28	陶器土器	甕	15.0													内径不明
296	D	S 5.28	陶器土器	甕	19.1													内径不明
297	D	S 5.28	陶器土器	甕	17.4													内径不明
298	D	S 5.28	陶器土器	甕	19.4													内径不明
299	D	S 5.28	陶器土器	甕	15.2													内径不明
300	D	S 5.28	陶器土器	甕	15.7													内径不明
301	D	S 5.28	陶器土器	甕	17.0													内径不明
302	D	S 5.28	陶器土器	甕	17.0													内径不明
303	D	S 5.28	陶器土器	甕	18.0													内径不明
304	D	S 5.28	陶器土器	甕	14.2													内径不明
305	D	S 5.28	陶器土器	甕	14.2													内径不明
306	D	S 5.28	陶器土器	甕	14.2													内径不明
307	D	S 5.28	陶器土器	甕	14.2													内径不明
308	D	S 5.28	陶器土器	甕	14.2													内径不明
309	D	S 5.28	陶器土器	甕	25.0													内径不明

写真図版



写真図版 1 A地区



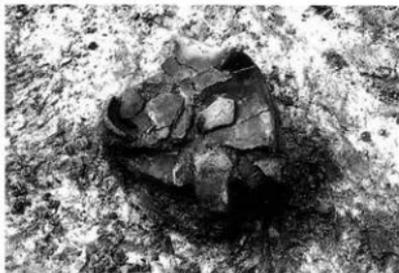
A地区全景（西から）



S X03検出状況（西から）



S X03遺物出土状況（南から）



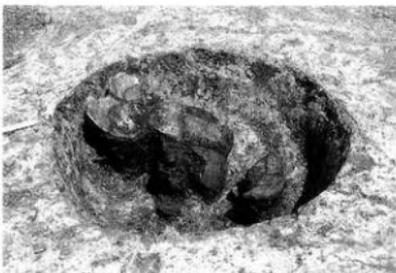
S X03遺物出土状況（南から）



S D10遺物出土状況（南から）



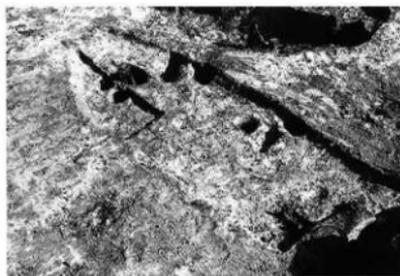
S D09・S D10（南から）



S K12遺物出土状況（西から）



B地区全景（東から）



SD14（南から）



SD14遺物出土状況（北から）



SK15（南から）



SK16遺物出土状況（北から）

写真図版3 C地区



C地区全景（西から）



SD06・SD07（西から）



SD06遺物出土状況（北から）



SD07C-C'セクション（西から）



SD07遺物出土状況（南から）



SK09遺物出土状況（北から）



SD17（西から）



SR21（北から）



SR21遺物出土状況（南から）



SD23・SK24遺物出土状況（南から）



SD27・SD28（南から）



SD26・SD27 D-D'セクション（北から）



SD29（北から）

写真図版 5 D地区



D地区全景（西から）



S K01（南から）



S K02・S K03（東から）



S K09（南から）



S K14遺物出土状況（北から）



SK16 (北から)



SD19 (西から)



SD19 A-A'セクション (東から)



SD19遺物出土状況 (北から)



SD27・SD28 (北から)



SD19・SD27 (東から)



SR23 (南から)



SK24・SD25・SK29 (北から)

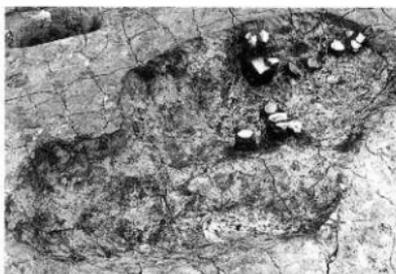
写真図版 7 E地区



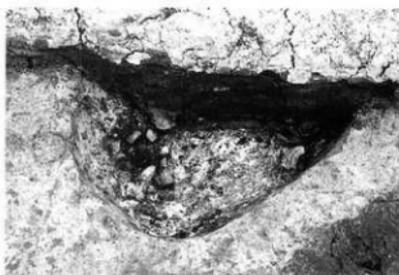
E地区全景 (西から)



SK01遺物出土状況 (西から)



SK11・SK12 (西から)



SK32 (南から)



SP21・SP22 (北から)



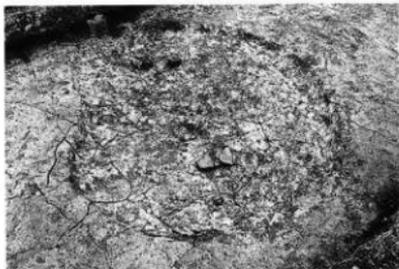
SE39 (北から)



SD28遺物出土状況 (南から)



F地区全景 (西から)



S K03 (南から)



S K04 (北から)



SR08 (西から)



表土掘削



作業風景



作業風景



3



276



197



62



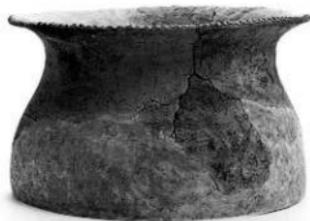
284



311



82



206



136



142



290



380



1



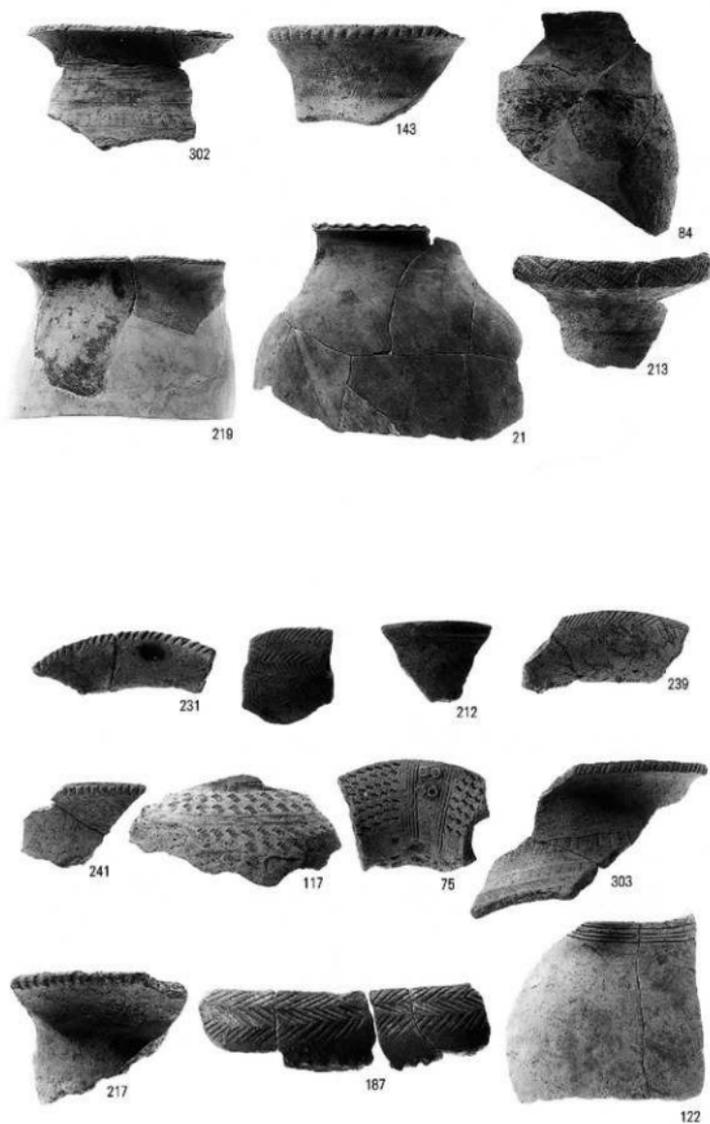
2

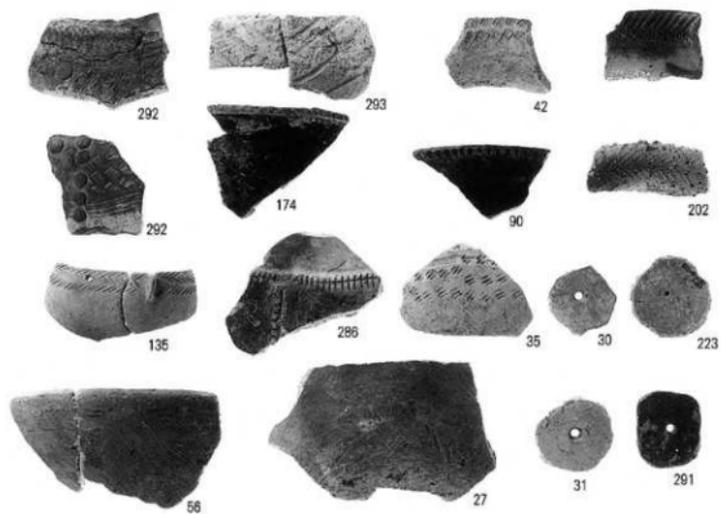
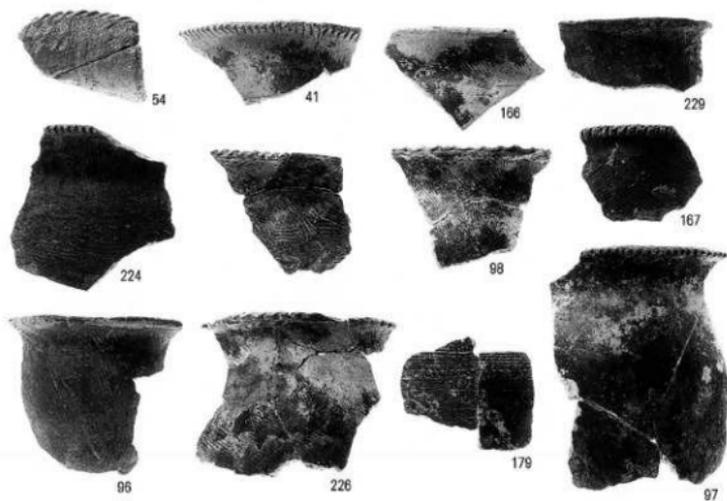


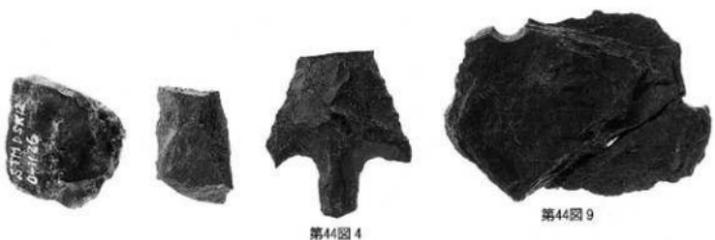
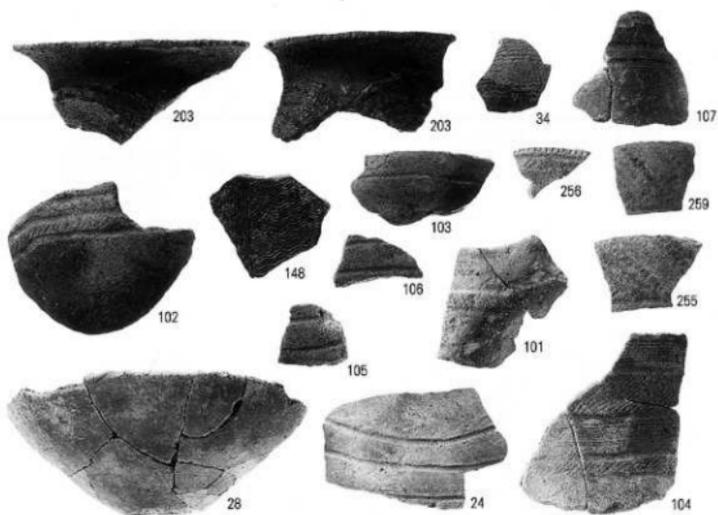
192



309





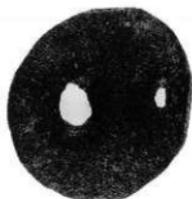




第45図 1



第45図 3



第45図 2



第45図 2



第45図 4



第45図 5



第45図 7



第45図 7

報告書抄録

ふりがな	つくりみちいせきはくつちょうさほうこく											
書名	作道遺跡発掘調査報告											
副書名	一市道松木作道線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査一											
編著者名	金三津英則（新湊市教育委員会・射水市教育委員会） 松尾洋次郎（關中部日本鉱業研究所）											
編集機関	新湊市教育委員会、射水市教育委員会											
発行機関	射水市教育委員会											
所在地	〒933-0292 富山県射水市加茂中部893番地 TEL 0766-59-8092											
発行年月日	西暦2006年3月31日											
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因				
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〇.〇°	〇.〇°							
作道遺跡	富山県 射水市 作道	211 (203)	030 (032)	36度 45分 03秒	137度 05分 31秒	20040701 ～ 20041217	939	市道改良				
						20051006 ～ 20051031			512			
						種 別				主な時代	主な遺構	主な遺物
						作道遺跡	集 落		弥生時代 (中期)	溝・土坑・柱穴・ 自然流路	弥生土器・土錘・打 製石斧・磨製石斧・ 石包丁・砥石・管玉 ・木製品	弥生時代中期の土器 が多く出土。果林式 土器の搬入品を含む。
		古墳時代	土坑	土師器								
		中 世	井戸	珠洲焼・底板								

※コード欄の()内の数字は合併前の富山県埋蔵文化財包蔵地図の遺跡番号を示す。

平成18年3月31日発行

作道遺跡発掘調査報告

市道松木作道線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査一

編 集 新湊市教育委員会・射水市教育委員会

発 行 射水市教育委員会

〒933-0292 富山県射水市加茂中部893

TEL 0766-59-8092

印 刷 前松本印刷

